

# 「時間」について

アリストテレース——アウグスチーヌス——ロック

II

鈴木 珣 雄

## II アウレリウス・アウグスチーヌス『告白』『第十一編』における時間論

(テキストは、a. 『教父著作集・ラテン語編』J・P・ミーニエ校訂。第三十二巻。パリ、一八七七年 (PLと略記)、b. 『アウグスチーヌス著作集』第十四巻。『告白』『第八編』——『第十三編』、M・スキュテラ校訂。デクレ・デ・プロウエル、一九六二年 (Sと略記)、c. 『クリスト者著作集・ラテン語編』第二十七巻。L・ヴェルハイエン校訂。トゥルンホルト、一九八二年、を照合し、c. によった)

II — 1

『告白・第十一編』で、天と地との創造者としての神について語ってきた(第五節・第三章以下)アウグスチーヌスが、〈時間〉の問題に思いを凝らすに至った契機は、論敵である・異端のマニ教徒 (Manichaei) が発した問い、「神は、

天と地とを造った以前に、なにを造ったか」という問いである(第十二節・第十章。p・200、2)。

この問いの趣意は、つぎのところにある。

(1) 神が、「天と地と」をであれ、また、〈なにももの〉をであれ、そもそも被造物を創造した時には、神の中には、「以前には一度も創出しなかった被造物を、創出しようとする・なにらかある・新しい運動(*illus motus nouus*)と、なにらかある・新しい意志(*illa voluntas noua*)とが、実在した」はずである(第十二節・第十章。p・200、5—6)。「なぜなら、神の意志は、被造物ではなく、被造物の以前にあるものであるからである。というのは、創造者の意志が先行しなかったのであれば、なにものも創造されはしなかったはずであるからである」(第十二節・第十章。p・200、7—8)。

(2) しかるに、「……神の意志は、神の実体そのものに(*ad ipsam……dei substantiam*)、属する……」(第十二節・第十章。p・200、9—10)。

してみれば、「創造」が行なわれたことは、神の「意志」に、(そして、創造の「運動」)に、〈変化〉が生じたことであり、〈変化〉は、〈時間〉の中で生ずるものであってみれば、〈変化〉する「意志」が「属する」「実体」もまた、〈時間〉の中にあり、「永遠」ではありえない。

(3) それゆえ、「神の実体の中に、以前には存在しなかった・あるもの(ある・新しい意志)が生じたとすれば、その実体は、真実には、永遠なる実体とは言われない」(第十二節・第十章。p・200、10—12)。すなわち、「存在しなかった(新しい)意志が生ずる場合に、どのようにして、神が、そもそも真実の永遠性であるであろうか」(第十二節・第十章。p・200、6—7)。

こうして、神は、〈なにももの〉をであれ(「天と地と」をであっても)、いやしくも、被造物を創出したとすれば、

神は、もはや、「永遠性」をもたないのである。

(4) ということは、「神」が「真実の永遠性」をもつためには、神の中には、いかなる被造物をであれ、それを創出しようとする「新しい意志」が、存在してはならない、ということである。

(5) したがって、神は、「真実の永遠性」をもつのであれば、〈なにももの〉をも、「天と地と」をも、〈造らなかつた〉のである。

(6) そして、そのように、「……神が、手を休め、すなわち、なにらの創作も行なわなかつた (non operabatur. 「天と地とを造らなかつた」とすれば」(第十二節・第十章。p. 200, 2-3)、同一 (1)——(4) の根拠に基づいて、神は、〈それ以前にも〉、なに一つ造りはしなかつた、すなわち、「神は、溯って (Hinc)、ひきつづき制作をやめていた」(第十二節・第十章。p. 200, 4)、としなければならぬ。

(7) いな、神は、〈過去〉において、〈なにももの〉をも〈造らなかつた〉ばかりではない。再び同一の根拠によって、神は、〈未来〉においても、〈なにももの〉をも造りはしないのである。「それとおなじく、神が、その後も (deinceps) 絶えず、そうでないのは、いかなる根拠によるのであるか」(第十二節・第十章。p. 200, 3-4)。

(8) こうして、「神」は、「真実の永遠性」であるのならば、〈過去||過ぎ去ってしまった時間〉においても、〈なんらの被造物〉をも〈造りはしなかつた〉し、〈未来||存在するであろう時間〉においても、〈なんらの被造物〉をも〈造りはしない〉。なぜなら、いやしくも、〈あるもの〉を造る時には、神の中に、「新しい意志」が生じ、それゆえ、神は、「永遠性」をもたなくなるからである。

(9) それゆえ、神に「永遠性」を是認するためには、神が〈万物の創造者〉であることを否認しなくてはならず、神が〈万物の創造者〉であることを是認するためには、神に「永遠性」を否認しなくてはならない。

(10) これにたいして、神は、被造物を創造するたびに「新しい意志」を抱いたのではなく、創造しようとする意志が、神の中に、〈永遠の初めから、休みなく不変であった〉、と言われるかも知れない。「しかるに、被造物を存在させようとする・神の意志が、休みなく不変であったとすれば、被造物もまた、休みなく不変でないのは、いかなる根拠によるのであるか」(第十二節・第十章。p. 200, 12-13)。すなわち、神は、「天と地とを造った以前にも」、〈休みなく不変に〉創造しつづけた、と言うのであれば、だからこそ問うのである——「いったい、「なにを造ったのか」と——。それが明示されなければ、神の・創造の意志が、「休みなく不変であった」、とは言いえないのである。

(11) それゆえ、残るのは、上の(9)である——。

## II — 2

このように、神の「永遠性」と、神が〈万物の創造者〉であることとは、両立しえないとして、両者の間を引き裂こうとする立論にたいして、アウグスチヌスは、こう答える。

(1) 「……いかなる物体も、時間の中でなくては、運動することがない……」(第三十一節・同二十四章。p. 210, 2-3)。物体の運動の〈要件〉は、「時間」である。(なぜなら、アウグスチヌスが、「物体」の「運動」と言う限り、その「運動」は、ロックにあってとおなじく、「物体」の「位置」の〈連続的变化〉であり、したがって、「時間」がなくては、「運動」はありえないからである)。

(2) それゆえ、論者は、〈神の・創造の運動〉と、「時間」を〈要件〉とする〈事物・物体の運動〉とを、混同して、〈神の・創造の運動〉もまた、「時間」を〈要件〉とした、と考えているのであり、だからこそ、〈神の・創造の運動〉に、〈以前〉と〈以後〉、〈過去〉と〈未来〉とをおいたのである。「おお、神の知恵よ、諸々の精神の光よ、か

く言う者たちは、いまだ、汝を理解していない。汝によって、また汝の中に、生ずるものが、どのようにして生ずるのかを、いまだ、理解していないのであって、永遠なるものを味わおうと努めながら、しかし、彼らの魂は、なお、事物の (*reum*)・過ぎ去ってしまった〔*||*過去の〕運動と (*praeteritis* [*motibus*])、存在するであろう〔*||*未来の〕運動 (*futuris motibus*)との中をうごめいており、なお空なのである」(第十三節・第十一章。p. p. 200—201, 1—5)。

(3) では、〈事物の運動〉の〈要件〉としての「時間」とは、いかなるものであるのか。「……過ぎ去ってしまった時間 (*praeteritum* [*tempus*])〔*||*過去の時間〕は、ごとごとく、存在するであろう (*futurum* [*tempus*])。〔*||*未来の時間〕から、追い出され、存在するであろう時間は、ことごとく、過ぎ去ってしまった時間から、生ずる……」(第十三節・第十一章。p. 201, 11—12)。

(「時間とは、なにであるか」は、いまだアウグスチヌスに明らかではないにしても、少なくとも、「過ぎ去ってしまった時間」は、「存在するであろう時間」から、「追い出され」、後者は、前者から、「生ずる」のであって、アリス・トテリスに臨んだのおなじく、「時間」は、両者から〈合成〉されたものであり、かつまた、それゆえに、〈絶えず、流れ来たり、流れ去り行くもの〉である)。

(4) 「時間」は、また、なにらかの〈長さ〉をもつ、と言われる。しかるに、「長い時間とは、数々の・過ぎ去り行く停滞に (*praeterentibus morulis*, PLとSとは、「過ぎ去り行く運動 (*motibus*) に) 基づいてでなくては、長くなることはない……」はずである。がしかし、にも拘らず、その「過ぎ去り行く停滞」は、「同時に、拡がることのできない」(第十三節・第十二章。p. 201, 8—9)。なぜなら、「時間」とは、〈絶えず、流れ来たり、流れ去って行くもの〉であるゆえに、「……いかなる時間も、そのすべてが現在する (*praesens*) ことは、ない……」からで

ある（第十三節・第十一章。p・201、11）。

(5) こうして、〈事物の運動〉の〈要件〉である「時間」とは、いかなる「停滞」も「拡張」をもたない「現在」を〈境界〉にして、絶えず、「過ぎ去ってしまった時間」となり、絶えず、「存在するであろう時間」となる〈流れ〉である。

論者が、〈神の・創造の運動〉と混同した〈事物の運動〉は、かかるものとしての「時間」の中にある。

(6) しかるに、「創造」の「運動」をする「神」の「時間」は、「過ぎ去ってしまった時間」となることがなく、「存在するであろう時間」となることがない。「神」の「時間」は、〈流れ来たり、流れ去る〉ことがないのである。「汝〔神〕」の年は、行くこともなく、来たることもない。いうまでもなく、すべての年が来たるために、行き来たるのは、われわれの年である。汝の年は、凝然として不動である(stagnant)がゆえに、同じ時に(still)、凝然として不動であり、行く年が、来たる年から排除されることがない。なぜなら、汝の年は、移り行くことがないからである」(第十六節・第十三章。p・202、18—23)。「……汝〔神〕」の年は、一日である。汝の日は、毎日ではなく、今日である。なぜなら、汝の今日は、明日へ去ることがないからであり、また、もとより、昨日につづくものではないからである。汝の今日が、汝の永遠性である」(第十六節・第十三章。p・202、23—25)。

このようにして、「神」は、「われわれ」の「時間」——〈「現在」を境界に、絶えず、流れ来たり流れ去るもの〉としての「時間」——の中にはない。いな、「神」は、「凝然として不動な」年、今日、すなわち「凝然として不動な」現在」という・「神」の「時間」の中に、「永遠性」の中に、あるのである。「しかるに、永遠性の中では、過ぎ去ってゆく(præterite)ものは、なに一つなく、すべては、現在している(præsens)」(第十三節・第十一章。p・201、9—10)。

(アウグスチーヌスが、「神」について、「絶えず凝然として不動な永遠性」と呼ぶのは(第十三節・第十一章。p・201、6)、「凝然として不動」な「現在」という「時間」のことである)。

(7) このように、「神」の「永遠性」は、「絶えず凝然として不動」の「現在」という「時間」であるゆえに、「われわれ」の「時間」が、神と〈永遠性を共有することはない〉。「そして、「われわれの」いかなる時間も(*nulla tempora*)、汝「神」とともに永遠(*coeterna*)であることは、ない。なぜなら、汝「神」は、とどまって来たり去ることがないものであるからである。しかるに、時間が、とどまって、来たり去ることがなかったのであれば、それは、「われわれの」時間ではなかったはずである」(第十七節・第十四章。p・202、213)。

(アリストテレスにあって、「絶えず存在するものは、時間の中には存在しない」とされた。アウグスチーヌにあって、「とどまって来たり去ることがない」神は、「永遠性」の中に、「絶えず凝然として不動」の「現在」という「時間」の中に、あるのであって、「われわれ」の「時間」の中には、ないのである)。

(8) それゆえ、〈神の・創造の運動〉は、この「凝然たる不動」の「現在」という「時間」において行なわれ、ここには、「過ぎ去ってしまった時間」も、「存在するであろう時間」も存在しない。したがって、論者のように、神の・「天と地と」の創造の「運動」に、〈以前〉と、〈以後〉とを語ることは、できないのである。

(9) さて、論者は、「神は、天と地とを造った以前に(*antequam*)、……」と言う。しかし、「以前に」と言うことができるためには、すでに、「時間」が〈存在〉したのである。「ところで、もし、天と地との「造出の」以前に、私たちの時間も存在しなかったのであれば、汝「神」が、その時に(*tunc*、「天と地との造出の以前に」)、なにを造ったかが、いかなる根拠によって、問われるであろうか。なぜなら、時間が存在しなかった時には、その時に(*tunc*)は存在しなかったからである」(第十五節・第十三章。p・202、1214)。「時間が」けっして存在しなかったならば、

どのようなにして、「時間が」過ぎ去って行ったのであるか」(第十五節・第十三章。P・202、8―9)。

すなわち、天と地との造出の「以前に」、「時間」が、「存在し」「過ぎ去って行った」ればこそ、論者は、「その時に」、「言いかえれば」「以前に」(antquam)」と、「問うことができる」のである。

(10) では、その「時間」は、誰によって「存在」せしめられたのであるか。もし「……汝〔神〕が、天と地とを造った以前に、数え切れぬ時」(secula)にわたって、創作の手を休めていた……」とするならば(第十五節・第十三章。P・201―202、2―4)、「その・数え切れぬ時は、汝〔神〕自身が造ったのでなくて、いったい、いかなる根拠によって、過ぎ去って行くことができたのであるか」(第十五節・第十三章。P・202、5―6)。「あるいは、汝〔神〕によって創出されずに、いかなる時間が存在したであろうか」(第十五節・第十三章。P・202、7―8)。

それゆえ、「……汝〔神〕が、一切の時の創出者であり、造出者である……」(第十五節・第十三章。P・202、6―7)、「……一切の時間の創作者である……」(第十五節・第十三章。P・202、9)、としなければならぬ。

こうして、「いうまでもなく、時間そのものを、汝〔神〕が造ったのであって、そして、汝が時間を造った以前に、時間が過ぎ去ってしまったことは、ありえなかったのである」(第十五節・第十三章。P・202、11―12)。

(11) したがって、論者のように、「神は、天と地とを造った以前に、なにを造ったか」と問うこと自体、すでに、〈神が、時間の創造者であること〉を、認めたことにほかならない。

(12) それゆえまた、「汝〔神〕が、天と地とを造った以前に、なんらかの時間が存在したとすれば、いかなる根拠で、汝が制作の手を休めていたと、言われるであろうか」(第十五節・第十三章。P・202、9―11)。――神は、「天と地とを造る以前に」、「凝然として不動」の「現在」の中で、少なくとも、「われわれ」の「時間」を造ったのである――。



(13) 〈流れ来たり、流れ去り行くもの〉としての・「われわれ」の「時間」は、「凝然として不動」の「現在」という「時間」、「永遠性」から、流れ出てくるのである。「そして、過ぎ去ってしまった時間と存在するであろう時間とはことごとく、凝然として不動な永遠性が、絶えず現在していることによって、創造され、そこから流れ出てくるのである」(第十三節・第十一章。p・201、13—14)。

(14) こうして、「神」は、「凝然として不動」の「現在」という・神の「時間」、「永遠性」において、「天と地と」をのみならず、「時間を造った」のである。「そしてまた、汝は、時間の上で、時間に先行するのではない。……そうではなく、汝は、絶えず現在している、永遠性の高みによって、一切の・過ぎ去ってしまった時間に先行するのであり、また、一切の・存在するであろう時間を凌駕するのである」(第十六節・第十三章。p・202、15—18。傍点は、引用者)。

## II — 3

「神」は、「時間を造った」。そしてまた、〈万物〉を造った。「それゆえ、汝〔神〕は、時間によらずしては、なによりつ造りはしなかった。なぜなら、汝は、時間そのものを、造ったからである」(第十七節・第十四章。p・202、1—2)。  
——すなわち、すべての〈被造物〉は、「時間」の中に存在する。被造物の〈存在〉の〈要件〉も、「時間」である——。

だがしかし、その「時間」そのものとは、いったい〈なに〉であるのか。アウグスティヌスは、アリストテレースとひとしく、「そもそも、時間とは、なに(Omnis)であるのか」という問いを、発する(第十七節・第十四章。p・202、3—4)。

この問いが発せられなければならない根拠は、つぎのところにある。

——神が造った「時間」が、「現在」を〈境界〉に、絶えず、「過ぎ去ってしまった時間」となり、「存在するであろう時間」となることは、私も知っている。それゆえ、「時間」とは、「過ぎ去ってしまった時間」と、「現在している時間」と、そして「存在するであろう時間」とである。また、私は、「時間」が、なにかの〈長さ〉をもつことも、知っている。

——いな、「……私たちが、日常話しをする時、時間よりも、馴染み深く(familiaris)、周知のもの(notius)として、思い起こされるものが、なにかあるであろうか。それに、私たちは、時間について日常話しをする時、必ず、「時間」を「理解する(intelligimus)」し、また、ほかの人が時間について話しをする時にも、「時間」を「理解する」(第十七章・第十四章。p・202、6—8)。

——たとえば、私たちは、過ぎ去ってしまった時間と、存在するであろう時間とについて、〈日常〉「長い時間、短い時間と、口で言う」(第十八節・第十五章。p・203、1)。百年前、あるいは百年後とは、「私たちが、過ぎ去ってしまった・長い時間」、「存在するであろう・長い時間」と「呼ぶ」ものであり、十日前、ないし十日後とは、「過ぎ去ってしまった・短い時間」、「存在するであろう・短い時間」と「口で言う」ものである(第十八節・第十五章。p・203、1—6)。

——このように、「時間」は、〈日常〉〈話され〉〈口で言われ〉〈理解される〉事柄であり、まことに〈馴染み深く〉〈周知〉のものである。すなわち、「時間」とは、「ありふれた日常事(usitata)」である(第二十八節・第二十三章。p・207、3)。

——それゆえ、「誰も私にたずねなければ、私は、「時間」を知っている」(第十七節・第十四章。p・202、9)。

——だがしかし、たとえば、「長い時間とは、数々の・過ぎ去り行く停滞に基づいてでなくては、長くなることはできない」にも拘らず、「時間」は、〈絶えず、流れ来たり、流れ去るもの〉であるゆえに、いかなる「停滞」も「拡がり」もあるはずはないのであった。

してみると、私は、「長い時間」を「知っている」にも拘らず、「長い時間」とは、実は、〈長さ〉をもたないものなのである。

——であるとすれば、「私は、「時間」を知っている」にも拘らず、「たずねる人に、私が解き明かそうとするならば、私は、「時間」を知っていない」と言わなければならない(第十七節・第十四章。p・202, 9)。(ログは、その時間論の初めで、アウグスチヌスの・右の言葉を、「君が問わなければ、私は、「時間」を」理解している」(ラテン語文)。(このことは、つぎのことに帰する。すなわち、私が、時間について思いをひそめればひそめるほど、私は、時間が理解されなくなる)、と引用している)。

——こうして、「私」は、「ありふれた日常事」である「時間」について、〈口で言い〉〈話し〉、そして〈理解して〉いながら、しかし、その実、「時間」を、「知っていないのである」——。

アウグスチヌスが、「時間」について思いを凝らすに至った経緯は、「時間」が、一方では、「ありふれた日常事」であるにも拘らず、同時に他方で、「深くかくされて・うかがうべからざる事柄」(abditus)であること、両者の間に断層のあることを、さとしたところにある(第二十八節・第二十三章。p・207, 4)。

いな、「私」ばかりではない。「誰か、時間を、わかりやすく、手短かに、解き明かしてくれた者でもいるであろうか。誰か(PL)では、「なぜなら」、時間について明言されるべき言葉を耳にして、あるいは、思考によって、時間を心にとらえるような者がいるであろうか」(第十七節・第十四章。p・202, 4—5)。

こうして、実は、「私は、「時間を」知っていないのである」。

だが、では、「私」は、「時間」について、〈なに一つ〉「知っていない」のであろうか。いな、である。

「しかしながら、私が確信をもって言うのは、自分が知っているのは、なにももの過ぎ去ってしまったのでなければ、過ぎ去ってしまった時間は存在しなかったはずである、ということであり、なにももの到来しなかったのであれば、存在するであろう時間は存在しなかったはずであり、なにももの存在したのでなければ、現在している時間は存在しなかった、ということである」(第十七節・第十四章。P・203、10―12。傍点は、引用者)。

なぜ、「私」は、このことだけは、「知っている」のであるか。

それは、「神」が、「現在している永遠性」の中で創出した「被造物」は、「時間」と「天と地と」そして〈万物〉であり、それゆえ、「神」が、「時間によらずしては、なに一つ造りはしなかった」、すなわち〈すべての被造物は、時間の中に、存在する〉とは、同時に、「……いかなる時間も、被造物なくしては、存在しない……」ということであり(第四十節・第三十章。P・215、9)、言いかえれば、「時間」は、〈被造物の存在〉の〈要件〉である以上、〈被造物の存在〉と〈不可分〉である、ということであるからである。

私は、少なくとも、右のことだけは、「知っている」。

だがしかし、このことを「知っている」ことから、いったい、なにが帰結するであろうか。

〈過ぎ去ってしまったもの・被造物・事柄〉は、いうまでもなく、〈すでに存在していない〉のであり、そしてまた、〈存在するであろうもの・事柄〉も、やはり、〈いまだ存在していない〉のである。

とすれば、〈被造物の存在〉と〈不可分〉な・二つの「時間」——「過ぎ去ってしまった時間」と、「存在するであ

ろう時間」と——もまた、〈存在するはずはない〉。「してみれば、過ぎ去ってしまった事柄が、すでに存在せず (jam non est)」、そして、存在するであろう事柄が、いまだ存在しない (nondum est) 場合に、あの・二つの時間、すなわち、過ぎ去ってしまった時間と、存在するであろう時間とが、どのようにして (quomodo) 存在する (sunt) であろうか」(第十七節・第十四章。p・203、12—14)。

さきのことを「知っている」ことの帰結として、アウグスチヌスもまた、アリストテレスとおなじく、〈すでに存在していない時間〉と、〈いまだ存在していない時間〉とに、直面したのである。

いな、そればかりではない。こうして、二つの「時間」は、いずれも、〈存在しない〉とすれば、「……存在しない (non est) ものが、いかにして (quo pacto)」、長く、あるいは短くあるであろうか。なぜなら、過ぎ去ってしまった時間は、すでに存在せず、存在するであろう時間は、いまだ存在していないからである」(第十八節・第十五章。p・203、6—7)。

それゆえ、「私」は、百年前、十日前について、あるいは、百年後、十日後について、「過ぎ去ってしまった」「長い」「時間」、「短い」「時間」、あるいは、「存在するであろう」「長い」「時間」、「短い」「時間」と、「話し」「口で言」、そしてそれを「理解する」にも拘らず、実は、そのような「時間」は、第一に、「存在しない」のであり、また第二に、「存在しない」時間に、「長い」「短い」はありえないのである。

「ありふれた日常事」である「時間」と、「深くかくされて・うかがうべからざる事柄」としての「時間」との間の断層は、いっそう拡がった。

アウグスチヌスは、いよいよ、「時間とは、なにであるか」について、想いをひそめざるをえない。

いな、「過ぎ去ってしまった時間」と「存在するであろう時間」とが、「存在しない」ばかりではない。ひとしく吟味すれば、「現在している時間」もまた、〈存在しないことへ、向かっている〉のである。

なぜか。「……現在している時間が、絶えず現在していたとし、過ぎ去ってしまった時間へ移り行くことがなかったとするならば、それは、すでに、時間ではなかったのであり、永遠性であったはずである」(第十七節・第十四章。p・203、14—16)。

「時間」とは、〈絶えず、流れ来たり、流れ去るもの〉である。それゆえ、「現在している時間」もまた、絶えず、「過ぎ去ってしまった時間」「すでに存在しない時間」へ、流れ落ちることを前提としてのみ、「現在している時間」なのである。

「それゆえ、現在している時間が、時間であるために、過ぎ去ってしまった時間に移り行くことになる」とすれば、私たちは、現在している時間も存在すると、どのようにして口で言うのであるか」(第十七節・第十四章。p・203、16—17)。

すなわち、「現在している時間にとって、存在することの根拠は、存在しなくなる、ということであって、したがって、現在している時間は、存在しなくなることへ向かっている、という条件がなくては、私たちとして、現在している時間が時間であるとは、真実には言いえないのである」(第十七節・第十四章。p・203、17—19)。

こうして、「過ぎ去ってしまった時間」は、「すでに存在せず」、「存在するであろう時間」は、「いまだ存在せず」、そして、「現在している時間」すらもまた、「存在しないことへ向かっている」のである。

アリストテレスは、「時間」は、〈存在が稀薄〉である、という立論に直面したが、アウグスティヌスにとってもまた、「時間」は、〈無存在〉の性格を色濃くもつものとして、立ち現われてきたのである。

## II — 5

私たちは、「過ぎ去ってしまった時間」が、実は「すでに存在しない」ことを知らずに、この時間について、(たしかに、「長くある」とは言わないけれども)、「長くあった」と「口で言い」、「存在するであろう時間」についても、「長くあるであろう」と「口で言う」(第十八節・第十五章。p・203、7—9)。

しかしながら、「過ぎ去ってしまった時間」が、「長くあった」のは、それが、「……長くあることができた……」からである(第十八節・第十五章。p・203、12)。

だが、「しかるに、過ぎ去ってしまった時間は、すでに存在しなかった。ゆえに、まったく存在しなかったもの(「過ぎ去ってしまった時間」)は、長くあることもできなかったのである」(第十八節・第十五章。p・203、13—14)。

「それゆえ、私たちは、『過ぎ去ってしまった時間が、長くあった』と口で言っではならない。——なぜなら、過ぎ去ってしまったがゆえに存在しない時には、なにが長かったのかも、私たちに見いだせるはずがないからである——」(第十八節・第十五章。p・203、14—17)。

とすれば、私たちが、「長くあった」と「口で言う」時、「過ぎ去ってしまった時間」ではない・他の〈なにか〉が、「長くあった」のである。

しかし、もとより、その〈なにか〉が「長くあった」のも、やはり、それが、「長くあることができた」からにはかならない。

では、「長くあることができた」ものは、〈なにか〉であるか。それは、「現在している時間」である。「なぜなら、現在している時間は、いまだ過ぎ去ってしまったものではなく、したがって、存在しなかったものではなく、そして、それゆえ、長くあることができたものであるからである」(第十八節・第十五章。p・203、18―19)。

こうして、あの〈なにか〉は、「現在している時間」である。「それゆえ、私たちは、『過ぎ去ってしまった時間が、長くあった』と口で言ってはならない。……—そうではなく、『あの・現在している時間が、長くあった』と口で言わなくてはならない。なぜなら、現在する時間であったがゆえに、長くあったのであるからである」(第十八節・第十五章。p・203、14―18)。

だが、私たちは、そう「口で言う」にしても、しかし、「現在している時間」が、はたして、「長くあることができるもの」であろうか。なぜなら、すでに、「現在している時間」は、「存在しないことへ向かっている」ことが、知られているからである。「そこで、人間の魂よ、私たちは、現在している時間が、長くあることができるかどうかを、吟味しなければならぬ」(第十九節・第十五章。p・203、21―22)。

まず、「吟味」すれば、現在している百年の〈すべて〉が、「長くあることができる」とは、言いえない。「なぜなら、百年 (centum anni) の・最初の年をとれば、その年は、現在している年であるが、しかし、九十九年は、存在するであろう年であり、そして、それゆえ、いまだ存在してはいないのである」(第十九節・第十五章。p・203、25―26)。ところで、第二年目をとれば、すでに一年は、過ぎ去ってしまった年であり、つぎが、現在している年であり、他は、存在するであろう年である」(第十九節・第十五章。p・203―204、26―28)。「そして、おなじようにして、この・百という数の中間にある・任意の年を、現在している年としておいたとしよう。その年の以前は、過ぎ去ってしまった年であろうし、その年の以後は、存在するであろう年であろう」(第十九節・第十五章。p・204、28―30)。



では、「とられた一年」(annus) そのものが、現在している時間であるかどうか(第十九節・第十五章。p. 204, 31-32)である。

「十二ヶ月が、一年である」(第十九節・第十五章。p. 204, 35)。「ところで、一年の・最初の月(mensis)をとれば、他の月は、存在するであろう月である。第二月目をとれば、最初の月は、すでに過ぎ去ってしまったのであり、そして、残りの月は、いまだ存在していないのである」(第十九節・第十五章。p. 204, 32-33)。「十二ヶ月の・任意の一月をとれば、その月は、現在しているが、[PLでは、「しかし」]他の月は、過ぎ去ってしまった月であるか、存在するであろう月である」(第十九節・第十五章。p. 204, 36-37)。

では、とられた一月のへすべてが、「現在している時間」であろうか。もとより、そうではない。「現在している」のは、〈一日〉である。「最初の日(dies)をとれば、他の日々は、存在するであろう日々であり、最終の日をとれば、他の日々は、過ぎ去ってしまった日々であり、中間にある・任意の日をとれば、その日は、過ぎ去ってしまった日々と、存在するであろう日々との間に、ある」(第十九節・第十五章。p. 204, 38-40)。

しかし、「また、一日全体が、現在しているのでもないから、一日自身をも、私たちは分割せざるをえない」(第九節・第十五章。p. 204, 42-43)。「なぜなら、一日は、まるまる二十四の・夜と昼との時(hora)によって充たされ、最初の時は、他の時を、存在するであろう時としてもち、最終の時は、他の時を、過ぎ去ってしまった時としてもち、そして、中間にある時の・あるものは、自分の前に、過ぎ去ってしまった時をもち、自分の後に、存在するであろう時をもつからである」(第十九節・第十五章。p. 204, 43-46)。

けれども、再び、この「時」が、〈すべて〉「現在している時間」であるのではない。私たちは、「時」自身を、またもや分割しないわけにはいかない。「ところが、その・一つの時もまた、逃れ去って行く微小部分となって」(signi-

tuis particulis)、流れて行く。すなわち、一つの時のうち、翔け去ってしまったものはいずれも、過ぎ去ってしまったもの〔微小部分〕であり、一つの時に残っているものはいずれも、存在するであろうもの〔微小部分〕である」(第二十節・第十五章。p. 204, 47—48)。

この「分割」の無限の進行は、「時間」の本性が、「現在」を〈境界〉として、〈絶えず、流れ来たり、流れ去って行くもの〉であるところに、根拠をもつ。

それゆえ、右の「微小部分」すらも、〈すべて〉が「現在している時間」ではなく、無限に「分割」されざるをえない。

こうして、「現在している時間」とは、ただ、つぎのように言われるもののみである。「どのような時間であれ、もはや、瞬間の・いかなる部分にも分割されえないもの (quod in nullas iam …… momentorum partes diuidi possit)、ないしは、瞬間の・この上もなく微細な部分にしか (in …… minutissimas momentorum partes) 分割されえないものが、理解されるとするならば、そのみが (id solum)、現在している時間と言わるべきものである」(第二十節・第十五章。p. 204, 48—50)。

このように、「現在している時間」とは、「瞬間の・いかなる部分」でもなく、あるいは、「瞬間の・この上なく微細な部分」でしかなく、「流れ行き」「翔け去る」ものであるにすぎない。それゆえ、こう言われる。「しかし、この・現在している時間は、存在するであろう時間から、過ぎ去ってしまった時間へ、瞬く間に (rapim)、翔け去って行く (transvolat) ものであるがゆえに、なんら停滞 (morula) の拡がりをもたない。なぜなら、拡がりをもてば、それは、過ぎ去ってしまった時間と、存在するであろう時間とに、分割されるからである」(第二十節・第十五章。p. 204, 52—53)。「しかるに、現在している時間は、なんら長さ (spatium) をもっていないものなのである」(同上箇所。

アウグスティヌスの言う・この「現在している時間」が、アリストテレスにあったの「今」である。なぜなら、アリストテレスにあっては、「今」は、「過ぎ去ってしまった時間」と、「存在するであろう時間」との「境界」にほかならなかったからである。

さて、さきには、「過ぎ去ってしまった時間」も、「存在するであろう時間」も、ともに「存在しない」ゆえに、「長くあることは、できなかった」。「長くあることのできる」ものは、「現在している時間」のみである、とされた。しかるに、いまや、こうして、「みよ、私たちが、ひとりそのみを、長いと呼ぶべきである、と見いだした。現在する時間……」(第二十節・第十五章。P・204、41-42)は、「吟味」を施したいま、実は、「なんら長さをもっていないもの」であることが、明らかにになった。

すなわち、「吟味」によって知られたのは、「過ぎ去ってしまった時間」が、「いまだ存在しない」ゆえに、「長くあった」ことはできず、「存在するであろう時間」が、「いまだ存在しない」ゆえに、「長くあるであろう」ことはできない、ということのみでなく、「現在している時間」もまた、「なんら長さをもつ」ことができない、ということでもある。

「現在している時間」が、「なんら長さをもつ」ことができないのは、この時間が、「存在するであろう時間」から、「過ぎ去ってしまった時間」の中へ、「瞬間に、翔け去って行く」ものにほかならないからである。そして、そのことが、「現在している時間」は、「存在しないことへ向かっている」と言われたのであった。

してみれば、私たちは、「過ぎ去ってしまった時間」について、「長くあった」と「口で言ってはならない」し、

「存在するであろう時間」について、「長くあるであろう」と「口で言ってはならない」が、それとひとしく、「現在している時間」についてもまた、「長い」と「口で言ってはならない」のである。

## II — 6

がしかし、それにも拘らず、人間の魂には、「……時間の長さ (morae) を、感ずること (sentire)、そして測ること (metiri) が、許されている……」(第十九節・第十五章。p. 203, 22—23)。「にも拘らず、主よ、私たちは、時間の「始まりと終りとの」間隔 (intervalla) を感じている (sentimus) のであり、また、それらを相互に比較するのであり、そして、あるもの「間隔」は、より長く、あるものは、より短い、と口で言う (dicimus) のである。また、われわれは、しかじかの時間が、しかじかの時間よりも、どれほど (quanto) 長いか、どれほど短いかを、測る (metimus) のであり、そして、この時間は、二倍ないし三倍である、あの時間は、一倍である、この時間とあの時間とはひとしい、と答える (respondemus) のである」(第二十一節・第十六章。pp. 204—205, 1—5)。

「時間の長さ」、「どれほど」を、「測る」こともまた、このようにして、「ありふれた日常事」である。

しかし、再び、それにも拘らず、さきの「吟味」の結果を動かすことは、できない。「しかるに、すでに存在していない・過ぎ去ってしまった時間、あるいはまた、いまだ存在していない・存在するであろう時間を、誰が測ることができようか。よもや、存在していないものを測ることができる、と言うのを耳にした人はあるまい」(第二十一節・第十六章。p. 205, 5—9)。

——「過ぎ去ってしまった時間」は、「すでに存在しない」ゆえに、「長さ」をもたず、「存在するであろう時間」も、「いまだ存在しない」ゆえに、「長さ」をもたない。いったい、「長さ」をもたぬ「時間」の「長さ」を、誰が、

「感じ」「測る」ことができようか——。

「時間の長さ」を、「感じ」「測る」ことは、「ありふれた日常事」(《経験》)であるにも拘らず、「吟味」は、そのことが不可能であることを、教えるのである。

## II — 7

こうして、「ありふれた日常事」(《経験》)と、「吟味」との・埋めえぬ断層の中に立たされたアウグスチーヌスの思考は、つぎのように、展開した。

「過ぎ去ってしまった時間」と「存在するであろう時間」との「長さ」を「測る」ことができないとは、もとより、この・二つの時間が、「長さ」をもたないからである。しかし、それは、この・二つの時間が、「存在しない」ことによる。しかるに、さらに、二つの「時間」が「存在しない」ことは、二つの時間の中に《存在してしまっただし、また《存在するであろう》《事柄》が、「存在しない」ことによる。言いかえれば、「過ぎ去ってしまった事柄」と、「存在するであろう事柄」とが、「存在しない」からである。

しかし、それにも拘らず、つぎのことは、《経験》として動かしがたい。それは、「……存在するであろう事柄を、予言してしまった (ceinernt) 人々……」がいた (第二十二節・第十七章。P・205, 7)、神に教えられた「預言者」が、これであった、ということであり (第二十五節・第十九章。P・206, 2—3)、また、「……過ぎ去ってしまった事柄を、物語る (narrant) 人々……」がいる、ということである (第二十二節・第十七章。P・205, 8—9)。

しかしながら、もとより、「過ぎ去ってしまった事柄」は、「すでに存在しない」し、「存在するであろう事柄」も、「いまだ存在しない」。してみると、「存在するであろう事柄を、預言してしまっただし、人々」は、「存在するであろう事

柄」を、〈どこか〉に、〈見てしまった〉のである。「過ぎ去ってしまった事柄を、物語る人々」も、「過ぎ去ってしまった事柄」を、〈どこか〉に〈見ている〉のである。

がしかし、「……存在していない事柄は、見られることが (uident) できない……」(第二十二節・第十七章。p. 205, 8)。であるとすれば、「過ぎ去ってしまった事柄」と「存在するであろう事柄」とを「見」、そして「物語り」「預言する」人がいる、という〈経験〉からみて、「過ぎ去ってしまった事柄」も「存在するであろう事柄」も、実は、〈どこか〉に、〈存在している〉のである。「してみると、存在するであろう事柄も、過ぎ去ってしまった事柄も、存在しているのである」(第二十二節・第十七章。p. 205, 10-11)。

では、「存在するであろう事柄を預言した人々は、その事柄がまだ存在しないとすれば、その事柄を、どこに (Ebn), 見てしまった (uident) のであろうか」(第二十二節・第十七章。p. 205, 7)。このことは、「過ぎ去ってしまった事柄を物語る人々」についても、言われなければならない。

しかし、〈どこか〉に〈見られた〉事柄は、〈そこに〉〈存在する〉のでなくてはならぬ。それゆえ、「私は知りたい、存在するであろう事柄と過ぎ去ってしまった事柄とが、もとより存在するとすれば、それらの事柄が、どこに (Ebn), 存在しているのかを」(第二十三節・第十八章。p. 205, 2-3)。

だが、いうまでもなく、「過ぎ去ってしまった事柄」と「存在するであろう事柄」とが、「存在している」ことは、ありえない。

してみれば、〈どこか〉に「存在している」そして「見られている」、二つの事柄は、「過ぎ去ってしまった事柄」〈そのもの〉でもなければ、「存在するであろう事柄」〈そのもの〉でもない。

それゆえ、〈どこか〉に、〈そこ〉に「存在している」そして「見られている」・二つの事柄は、もはや、〈現在して

いる事柄〈以外のものではない。それゆえ、「いまだ私の力及ばずとしても、しかし、私は知っている、両者〔存在するであろう事柄と、過ぎ去ってしまった事柄と〕が、たとえどこに (ubi) 存在するにせよ、そこに (ibi) 存在しているのは、あの・存在するであろう事柄ではなく、ないしは、あの・過ぎ去ってしまった事柄ではなく、現在している事柄 (praesentia) である」(第二十三節・第十八章。p. 205, 3—4)。「それゆえ、たとえどこに存在するにせよ、存在しているものがなにであるにせよ、それは、現在している事柄以外のものではないのである」(第二十三節・第十八章。p. 205, 6—7)。

## II — 8

では、その「現在している事柄」とは、「なに」であり、そして「どこに」、「存在している」のであるか。

「過ぎ去ってしまった事柄」を「物語る」人々についていえば、「現在している事柄」とは、その人が描く「心像」であり、そして、「心像」が、その人の「魂」の「記憶」の中に、「存在している」「見られている」のである。「たえ、過ぎ去ってしまった事柄が、真実なものとして物語られるにしても、それは、過ぎ去ってしまった事物そのもの (res praesae) が、記憶 (memoria) から取り出されるのではない。そうではなく、過ぎ去ってしまった事物が、過ぎ去り行きながら、感覚器官 (sensus) をつうじて、魂の中に (in animo)、いわば足跡のように刻み込んでしまっている (fixant) 心像 (imagines) から、すなわち、過ぎ去ってしまった事物の心像から、述べられる言葉が取り出されるのである」(第二十三節・第十八章。p. 205, 7—10)。

たとえば、「いうまでもなく、私の幼少時代は、すでに存在せず、それは、過ぎ去ってしまった時間の中に存在し、過ぎ去ってしまった時間は、すでに存在していない。けれども、私は、自分の幼少時代の心像を、想い起こし (re-

color)、また物語る (narrate) 時に、自分の幼少時代の心像に、心を向けている (intueor) のである。なぜなら、その心像は、なお (adhuc)、記憶の中に存在しているからである」(第二十三節・第十八章。p・205、10-13)。

この「記憶の中に存在している」「想い起こされる」「心像」こそ、あの「現在している事柄」であり、私は、それを「物語る」のである。「過ぎ去ってしまった事物」は、「記憶の中に存在している」「心像」となって、なお「現在している事柄」であり、そして、それは、「魂」の中に、「見られ」「存在している」のである。

ところで、こうした「現在している事柄」は、「現在している時間」の中に、「存在している」以外のものではない。そして、「現在している事柄」とは、「過ぎ去ってしまった事物」の「心像」であり「記憶」であり〈想起〉である。しかるに、「心像」「記憶」〈想起〉、まして、それを〈物語る〉ことは、〈持続〉の中にある。

だが、「現在している時間」は、「なんら長さをもたない」ものであった。

とすれば、〈持続〉する「心像」「記憶」〈想起〉〈物語り〉が、「現在している時間」の中に、「存在する」ことは、ありえない。

してみれば、むしろ逆に、「過ぎ去ってしまった事物」についての「現在している事柄」(「心像」「記憶」〈想起〉〈物語り〉)こそが、「現在している時間」である、とするほかはない。

(本稿・次々節に見るように、アウグスチヌスにあって、いわゆる「過去」とは、実は、「過ぎ去ってしまった事柄」についての・現在している時間」である、とされる意味と理由とは、上のところにある、と解さなければならぬ。

しかも、「現在している事柄」とは、「過ぎ去ってしまった事物」の「心像」「記憶」〈想起〉であって、それが、「現在している時間」なのであるから、これも本稿・次々節に見るとおり、いわゆる「過去」とは、「過ぎ去ってしま



った事柄についての・現在している記憶」である、とされるのである。

## II — 9

つぎに、「存在するであろう事柄」の「預言」についていえば、「存在するであろう事柄が予告されるべき (praedictenda) 根拠 (causa) もまた、おなじであるか、どうか」、である (第二十三節・第十八章。p. 205, 13—14)。

まず、「物語」られる「過ぎ去ってしまった事物」が、「魂」の中に、「現在している事柄」「心像」として、「存在している」のおなじように、「いまだ存在していない事物の心像が、すでに実在しているもの (iam existents) として予知されている (praesentantur)」のが、「根拠」であるか、どうか、である (第二十三節・第十八章。p. 205, 14—15)。

しかり、である。なぜなら、もとより、「存在するであろう事物」について「予知されている」「心像」が、「現在している事柄」として、「魂」の中に「実在している」「見られている」のでなければ、「存在するであろう事物」は、「予告」されることができないからである。

すなわち、「……見ている者にとっては、存在するであろう事物が、存在するのではなく、すでに現在している事柄が、存在しているのであり、現在している事物に基づいて、魂に抱かれた (animó concepta) ・存在するであろう事物が、予告されるのである。その抱像 (conceptiones, 心像) は、逆に、すでに存在しているのであり、存在するであろう事柄を予告する者は、現在している・その抱像に、自分の中で (apud se) 心を向けるのである」(第二十四節・第十八章。p. 206, 26—29)。

こうして、「存在するであろう事柄」を「予告」する場合に、この「予告」の「根拠」であるものは、第一に、こ

の「魂に抱かれた」・「存在するであろう事柄」の「抱像」である。

だがしかし、この場合には、「根拠」は、それのみではない。右の「抱像」のほかに、いま一つ〈なにか〉が、〈すでに現在している〉はずである。

なぜなら、「もとより、私は、私たちの・存在するであろう行為 (actions, 「行なわんとする行為」) が予考される (premeditārī) こと、その予考が現在しているものであることは、知っている。けれども、私は、私たちが予考する行為が、いまだ存在しないことを、知っている。なぜなら、それは、存在するであろう行為であるからである。その「予考された」行為に、私たちが取りかかってしまったであろう時、すなわち、私たちが、自分の予考した事柄を行ない始めてしまったであろう時、その時には、その行為は、存在することになる。なぜなら、その時には、その行為は、存在するであろう行為ではなくて、現在している行為になるからである」(第二十三節・第十八章。p・206、16—21。PLでは、右の文章の最後は、「現在している行為であるからである」)。

この場合、〈予考された行為〉に、「私たちが取りかかってしまう」「自分の予考した事柄を行ない始めてしまう」、すなわち、「存在するであろう事物」としての「行為」が、「現在している行為になる」のは、〈予考内容〉である「抱像」のままに、「行為」を実現する〈意図〉による。

この〈意図〉が、「いまだ存在していない」「存在するであろう事物」の・しかし「現在している」「存在している」「根拠」の第二のものである。

なぜなら、この〈意図〉が、「現在している」のでなければ、私は、自分の「行為」を「予告する」ことはできないからである。それゆえ、この〈意図〉も、「抱像」とともに、「魂」の中に「見られている」ものでなくてはならない。

したがって、自分の「行為」を「予告する」時には、一つには、〈予告内容〉としての・「行為」の「抱像」と、そして、二つには、「存在するであろう行為」が「現在している行為になる」ための〈意図〉とが、「根拠」として不可欠である。

では、たとえば、私が、曙光を見、「昇ってくる太陽を、予告する (praenuntio)」(第二十四節・第十八章。p. 206, 30—31) 場合には、「予告」の「根拠」は、なにであろうか。

「私が見ているもの(曙光)は、現在しているものであり、私が予告する事柄(太陽の昇り)は、存在するであろうものである」(第二十四節・第十八章。p. 206, 31—32)。すなわち、「……太陽が昇ることは、いまだ存在していない……」のである(第二十四節・第十八章。p. 206, 32—33)。

「けれども、「太陽が」昇ること自体を、私が、……魂によって心像に描いていた (imagination) のでなければ、私は、「太陽が」昇ることを、予告することはできなかったであろう」(第二十四節・第十八章。p. 206, 33—34)。

こうして、やはり、第一には、〈太陽の昇り〉が、「現在している事柄」「心像」として、「魂の中に」「存在しており」「見られる」こと——それが、〈太陽の昇り〉を「予告・予告」する「根拠」の一つである。

しかし、そのみではない。「しかしながら、私が天空に見ている・あの曙光は、いかにそれが、太陽の昇ることを予告するにしても、太陽が昇ることもなければ、また、魂の中にある・あの心像でもないのである」(第二十四節・第十八章。p. 206, 34—36)。

すなわち、この場合には、私が、目で見ている曙光、「現在している」曙光を、「存在するであろう事柄」である〈太陽の昇り〉の〈前兆〉として、「魂の中に」抱くことが、〈太陽の昇り〉を「予告・予告」する「根拠」の第二なのである。

「それゆえ、存在するであろう事柄が見られる、と口で言われる時には、いまだ存在していない事柄そのもの (*ipsa*) が見られているのではなく、すなわち、存在するであろう事柄が見られているのではなく、その・存在するであろう事柄の・すでに存在している根拠あるいは前兆 (*signa*) が、おそらく見られているのである」(第二十四節・第十八章。P・206、24―26)。

こうして、〈太陽の昇り〉を「予示・予告」する「根拠」は、一つには、「魂の中に」「現在している」・〈太陽の昇り〉の「心像」であり、二つには、見る目にとって「現在している」ばかりでなく、「魂の中に」も、〈太陽の昇り〉の「前兆」として、「現在している」曙光である。

そこで、こう言われる。「この・二つの (*top*)・現在している事柄 (〈太陽の昇り〉の「心像」と、〈太陽の昇り〉の「前兆」としての曙光) とが、明確に「魂によって」知覚され (*certitum*) てこそ、あの・存在するであろう事柄 (〈太陽の昇り〉) が、前もって口で言われる「予示・予告される」のである」(第二十四節・第十八章。P・206、36―37)。

こうして、「それゆえ、存在するであろう事柄は、いまだ存在しないのであり、そして、いまだ存在していないのであれば、それは、存在しないのであり、そして、存在しないのであれば、見られることは、まったく、できない。けれども、存在するであろう事柄は、諸々の・現在している事柄 (「心像・抱像」、 「前兆」) に基づいて (*ex*) 「根拠」として、予告されることができるのである。なぜなら、これらの・現在している事柄は、すでに存在し、かつ見られているからである」(第二十四節・第十八章。P・206、37―40)。

〈太陽の昇り〉のみではない。「神」が、「預言者たち」に、「存在するであろう事柄を教える方法 (*modus*)」もまた、まさにこれである。「……汝〔神〕が教えるのは、存在するであろう事柄についての・諸々の・現在している事柄

……」である（第二十五節・第十八章。p・206、214）。

そこで、再び言えば、こうした「現在している事柄」は、ほかでもなく、「現在している時間」の中に、「存在している」。

そして、「現在している事柄」とは、「存在するであろう事柄」の「心像・抱像」であり、「前兆」である。

ところで、「心像・抱像」、「前兆」、そして、それを「予告・予告し」「預言する」ことは、〈持続〉の中にある。しかるに、「現在している時間」は、「なんら長さをもたない」ものである。

それゆえ、〈持続〉する「心像・抱像」「前兆」「予告・予告」「預言」が、「現在している時間」の中に存在することは、ありえない。

とすれば、むしろ逆に、「存在するであろう事柄」についての「現在している事柄」（「心像・抱像」「前兆」「予告・予告」）こそが、「現在している時間」である、と考えなくてはならない。

ここに、本稿・次節に見るように、アウグスチヌスにあって、いわゆる「未来」とは、実は、「存在するであろう事柄」についての「現在している時間」である、と言われる意味と理由とがある。

ところで、「存在するであろう事柄」が、私の「行為」であって、その「行為」の「心像」と〈意図〉とが、「現在している事柄」として、私の「魂の中に」「存在している」時にも、そしてまた、「存在するであろう事柄」が、〈太陽の昇り〉であって、その〈太陽の昇り〉の「心像・抱像」と「前兆」とが、「現在している事柄」として、私の「魂の中に」「存在している」時にも、さらに、「預言者たち」ととって、「存在するであろう事柄」の「心像」と「前兆」

とが、「現在している事柄」として、預言者たちの「魂の中に」「存在している」時にも、ひとしく、「魂の中には」、また、「予告され」「予示され」「預言される」事物（「存在するであろう事物」）にたいする〈期待〉があるはずである。

なぜなら、〈意図〉は、「存在するであろう事柄」としての「行為」にたいする〈期待〉と不可分であり、「前兆」が、「魂の中に」「存在している」とは、「予示・予告」され「預言」される事柄が、〈期待〉されていることにはかならないからである。

してみれば、「存在するであろう事柄」についての「現在している事柄」の中には、また、この〈期待〉をも、含めなければならぬ。

しかるに、「現在している事柄」は、「現在している時間」の中にしか、「存在」していない。

だが、「現在している時間」は、「なんら長さをもたない」。

それゆえ、〈持続〉するものとしての〈期待〉が、「現在している時間」の中に存在することは、ありえない。

そこで、逆に、「現在している時間」とは、「存在するであろう事柄」についての〈期待〉（「現在している事柄」）である、と考えなくてはならない。

ここに、本稿・次節に見るとおり、アウグスティヌスにあって、いわゆる「未来」とは、「存在するであろう事柄」についての・現在している期待」である、とされる理由がある。

## II — 10

本稿・前出II——6から前節II——9までに見たように、アウグスティヌスは、「過ぎ去ってしまった時間」を、

「過ぎ去ってしまった事柄」に、帰着させ、さらに、「過ぎ去ってしまった事柄」を、「現在している事柄」(「過ぎ去ってしまった事柄」の「心像」、「記憶」、「想起」)、「そして〈物語り〉」という《魂の働き》に、帰着させた。

そして、こうした「現在している事柄」こそが、「現在している時間」とされた。

また、「存在するであろう時間」も、「存在するであろう事柄」に、帰着せしめられ、そしてさらに、「存在するであろう事柄」は、やはり「現在している事柄」(「存在するであろう事柄」の「心像・抱像」、「意図」、「前兆」、「期待」、そして「予告・予告」)という《魂の働き》に、帰着せしめられ、そして、これまた、「現在している事柄」こそが、「現在している時間」とされた。

こうして、「現在している時間」とは、一つには、「過ぎ去ってしまった事柄」の「心像」「記憶」「想起」〈物語り〉であり、二つには、「存在するであろう事柄」の「心像・抱像」〈意図〉「前兆」の「期待」「予告・予告」「預言」であって、いずれも、《魂の働き》以外のものではない。

しかし、《魂の働き》には、「過ぎ去ってしまった事柄」と「存在するであろう事柄」とについてのもののほか、いま一つ、(上)に見た「現在している事柄」とはことなつて、《魂の働き》として「現在している事柄」ではなく、《魂》にとつては外部にある〈現在している事柄〉についての《魂の働き》が、あるはずである。

アウグスチヌスは、この《魂の働き》を、「現在している事柄についての凝思」と呼ぶ。

しかし、この「凝思」もまた、《魂の働き》としては、「現在している事柄」であり、また、「凝思」は、〈持続〉するものであるがゆえに、「長さ」をもたぬ「現在している時間」の中には、存在しないのであって、逆に、「凝思」こそが、「現在している時間」である、と考えられなければならない。

こうして、いま、アウグスチヌスは、三つの「現在している時間」を、もつことになつた。

そして、くりかえせば、その・三つの「現在している時間」とは、実は、「過ぎ去ってしまった事柄」についての「記憶」と、「現在している事柄」についての「凝思」と、そして、「存在するであろう事柄」についての「期待」と、であるにほかならない。

アウグスチヌスが、このように、「現在している時間」を、『内面の働き』としてとらえたことは、丁度、アリストテレスが、「時間」を、まず、「〔心が〕運動〔思考内容の変化〕」を、以前と以後とに分けて、数え上げることで「ある」と規定したのとひとしい。

そして、このところから、アウグスチヌスは、つぎのように述べることになる。「私たちが、子どもの時に学び、また、子どもたちに教えたように」(第二十二節・第十七章。p・205, 3)、「時間は、三つである、すなわち、過ぎ去ってしまった時間」と、現在〔現在している時間〕と、未来〔存在するであろう時間〕とである、と言うのは、正しくない。そうではなく、おそらく、つぎのように言われたのであれば、正しいであろう。時間は、三つである、すなわち、過ぎ去ってしまった事柄についての・現在している時間、現在している事柄についての・現在している時間、存在するであろう事柄についての・現在している時間である、と」(第二十六節・第二十二章。p p・206—207, 2—5)。

そして、つづいて、言われる。「なぜなら、これら・三つの時間は、魂の中にある (in anima)、ある・三つのものであり、私は、魂の中以外では、三つの時間を知らないからである。すなわち、三つの時間とは、過ぎ去ってしまった事柄についての・現在している記憶 (præsens de præteritis memoria) であり、現在している事柄についての・現在している凝思 (præsens de præsentibus contitius) であり、存在するであろう事柄についての・現在している期待 (præsens de futuris expectatio) である」(第二十六節・第二十二章。p・207, 6—7)。



いわゆる「過去」「現在」「未来」「記憶」「凝思」「期待」に《内面化》された。これが、「時間とは、なにであるか」についての・アウグスチヌスの一つの結論である。

## II — 11

こうして、「過去」「現在」「未来」を、三つの「現在している時間」、いな、「現在している」「記憶」「凝思」「期待」に《内面化》したアウグスチヌスは、ここで、《時間を測る》という問題に転ずる。

これは、アリストテレスが、「時間」を、「心が」運動〔思考内容の変化〕を、以前と以後とに分けて、数え上げることである」と《内面化》したあと、にわかに、「時間」は、「運動の尺度である」という議論に転じたのに似ている。

すなわち、すでに見たように、アウグスチヌスは、人間の魂には、「時間の長さを、感ずること、そして測ることが、許されている」と述べていた。また、「私たちは、時間の〔始まりと終りとの〕間隔を感じているのであり、また、それらを相互に比較するのであり、そして、あるもの〔間隔〕は、より長く、あるものは、より短い、と口で言うのである。また、私たちは、しかじかの時間が、しかじかの時間よりも、どれほど長いか、どれほど短いか、を測るのであり、そして、この時間は、二倍ないし三倍である、あの時間は、一倍である、あるいは、この時間とあの時間とは、等しい、と答えるのである」と語っていた。

アウグスチヌスは、いま再び、このことを想起しつつ、こう述べる。「さて、私は、少し前に、……たとえば、この時間は、あの・一倍の時間に比べて、二倍である、と口で言うことができるし、そして、私たちは、時間の部分の・他の・どのようなものをも、測ることによって、人に示すことができる、と言った」(第二十七節・第二十一章。

P・207、114)。

しかるに、「過ぎ去ってしまった時間」は、「すでに存在しない」ゆえに、これを〈測ることはできない〉し、「存在するであろう時間」も、「いまだ存在しない」ゆえに、これを〈測ることはできない〉のであった。

そこで、残ることとして、私たちは、「現在している時間」を「測っている」はずである。

だが、「現在している時間」もまた、すでに見たように、「なんら長さをもたないもの」であった。とすれば、「……現在している時間が、長さをもたないのに、どのようにして(quantod)それを測るのであるか」(第二十七節・第二十一章。P・207、718)。

一倍、二倍、三倍と「口で言う」のは、「……時間の長さ以外を……」、口で言っているのではないのである(第二十七節・第二十一章。P・207、1416)。「けれどもしかし、ある長さの中にある時間をでなくて、なにを、私たちは測るのであるか」(第二十七節・第二十一章。P・207、1314)。

それゆえ、「過ぎ去ってしまった時間」と「存在するであろう時間」とはもとよりのこと、「現在している時間」をもまた、私たちは〈測ることができない〉のである。

アウグスチーヌスは、またもや、さきに見た(本稿・前出II—6)矛盾の中に立たされるのである。

しかし、これにたいして、こう考えることができる。——私たちは、「時間」を、それが「過ぎ去ってしまった時間」(Cum...praeterit)ではなく、「過ぎ去って行く時に(cum praeterit)」「測る」のである——と(第二十七節・第二十一章。P・207、910)。「しかし、私たちが感ずることによって測る時には、過ぎ去って行く時間(praeteruntia tempora)を測っているのである。しかるに、すでに存在していない・過ぎ去ってしまった時間、あるいは、いまだ存在していない・存在するであろう時間を、誰が測ることができようか。……それゆえ、時間が過ぎ去っ

ていく時には、その時間は、感じられることができ、測られることができるがしかし、時間が過ぎ去ってしまった時には、時間は、存在しないのであるから、感じられることができず、測られることができない」(第二十一節・第十六章。p・205、5—10)。

だがしかし、この考えも、「吟味」にたえるものではない。なぜなら。

「過ぎ去って行く時間」は、「過ぎ去って行く」ものである以上、へどこからか、へどこかをへて、へどこかへ、「過ぎ去って行く」のである。「しかし、「過ぎ去って行く時間は」、測られる時に、どこから(unde)、どこをへて(enb)、どこへ(bo)、過ぎ去って行くのであるか」(第二十七節・第二十一章。p・207、10—11)。

もちろん、「存在するであろう時間から」、「現在している時間をへて」、「過ぎ去ってしまった時間へ」である(第二十七節・第二十一章。p・207、11—12)。

してみると、「過ぎ去って行く時間」というものは、「……いまだ存在していないものから、長さを欠いているものとおり、すでに存在していないものへ……」、過ぎ去って行くのである(第二十七節・第二十一章。p・207、12—13)。

しかるに、「いまだ存在していないもの」も、「すでに存在していないもの」も、いずれも、これまた、「長さを欠いている」。

「してみると、私たちが、過ぎ去って行く時間を測るのは、どの長さの中で(ü) onb spspaf(oi)なのであるか」(第二十七節・第二十一章。p・207、12—13)。

こうして、「過ぎ去って行く時間」もまた、なにらの「長さ」をもたず、それゆえ、やはり、へ測られることができないのである。

なるほど、私たちが「時間」を「測る」ことは、「口で言い、耳で聞き、理解し、理解される」事柄であり（第二十八節・第二十二章。p・208、17―18）、「明白この上もなく・この上なくありふれた日常事」である（第二十八節・第二十二章。p・208、18―19）。にも拘らず、「時間」は、〈測られることができない〉。

まことに、「時間」とは、「この上もなく錯綜した謎」であり（第二十八節・第二十二章。p・207、1―2）、「深くかくされて・うかがうべからざるもの」（第二十八節・第二十二章。p・207、4）、「あまりにもかくされて・未知のもの」であって（第二十八節・第二十二章。p・208、19）、「その蔽いをはぐことは、非凡の事柄」である（第二十八節・第二十二章。p・208、19―20）。

だがしかし、「吟味」によって、「時間」は〈測られることができない〉ことを見いだしたアウグスチヌスも、なお、「時間」は、「どのようにして」(「*opponit*」)、「測られるか」という問いを、断念しない。

断念しないのは、二つの理由がある。

一つには、アウグスチヌスが、「時間」を《内面化》したことにより、「想起」「凝思」「期待」は、〈持続〉するものとなり、それゆえに、なにかの・〈持続〉の〈長さ〉をもつものであるところから、アウグスチヌスが、その〈持続〉の〈長さ〉を、「時間」の〈長さ〉と思いがえたことによるのである。

二つには、アウグスチヌスが「測られる」ものとしておく「時間」は、これまた、次第に明らかになるとおり、実は、〈持続〉のことなのであるが、しかし、アウグスチヌスは、それを自覚せぬままに、〈持続〉を、「時間」と混同してしまったところにある。

もとより、アウグスチヌスが、ここで、「時間」の〈長さ〉を「測る」としたのは、誤りである。私たちは、事

柄の〈持続〉を「測る」のであり、それを「測る」《尺度》が、年、月、日、時、分、等々であって、これらによって、事柄の〈持続〉を、「測る」ことが、「時間」なのである。

しかし、本稿・後出Ⅱ——13に見るとおり、アウグスチヌスは、「日」を、〈持続〉を「測る」《尺度》として、とらえることができなかった。アウグスチヌスが、しばしば、「時間」とことなるものとしての〈持続〉に近づきながらも（後出Ⅱ——15、Ⅱ——18）、なお、両者の混同を脱し切れないのは、そこに原因をもつ。

## Ⅱ——12

さて、「時間」〈持続〉は、「どのようにして」「測られる」か、という問いを抱きながら、アウグスチヌスは、ここで、アリストテレスに臨んだのおなじ問題を、考察することになる。「私は、ある・学識ある人から、聞いている。太陽と月とそして星との〔円環〕運動(motions)が、時間そのものである、と。しかし、私は、同意しなかった」(第二十九節・第二十三章。p・208、1—2)。

アウグスチヌスが「同意しなかった」理由は、三つである。

第一。「なぜなら、すべての物体の運動が、時間でないのは、いかなる根拠によるのであるか」(第二十九節・第二十三章。p・208、2—3)。——〈天体の円環運動〉が、「時間そのもの」であるとすれば、「すべての物体の運動」が、ろくろの回転運動ですら、「時間そのもの」であるはずである。「しかるに、私は、あの・木製のろくろの円環運動(circular)が、日である、と言ったこともないし、……」(第二十九節・第二十三章。pp・208——209、1—13)——。こうして、「運動」と「時間」とは、〈別個〉のものである。

第二。「運動」の〈要件〉が、「時間」である。「もし誰かが、時間は、物体の運動である、と言うにしても、汝

〔神〕は、私に、それを承認せよ、と命ずるであろうか。汝は、命じない。なぜなら、私は、いかなる物体も、時間の中でなくては、運動することがない、と聞いているからである。汝が、かく言うのである。しかし、物体の運動そのものが、時間である、ということは、私は聞いていない。汝が言わないのである」(第三十一節・第二十四章。p. 210, 1-4)。あるいはまた、「私たちが、いまのことを口で言った時、私たちもまた、時間の中で話していたのではないか……」(第二十九節・第二十三章。p. 208, 7-8)。

こうして、「時間」は、〈天体〉を含めて「物体」の「運動」の、のみならず、「話す」という「運動」の、〈要件〉なのであり、この理由からも、「運動」と、「時間」とは、〈別個〉である。

第三。「運動」(の〈持続〉)を「測る」〈尺度〉が、「時間」である。「もし天空の光がなくなり〔天体の運動が存在せず〕、ろくろが運動したとすれば、時間は存在しなかったであろうか。〔いな〕私たちは、時間によって (tempus, orb, ろくろの回転) (の〈持続〉) を測ったのであり、あるいは、時間によって、ろくろが等速で運動している、と言ひ、ないしは、ろくろが、ある時は、速く、ある時は遅く、運動したのであれば、私たちは、ある回転 (の〈持続〉) は長くかかった、ある回転 (の〈持続〉) は長くはかからなかった、と言ったのである」(第二十九節・第二十三章。p. 208, 3-7)。——ろくろの回転の・「時間」の「長さ」(〈持続〉) を、私たちは、「時間によって」「測って」、回転が、あるいは「長くかかった」、あるいは「長くはかからなかった」と言うのである——。

さらにまた、「……私たちの言葉の中で、ある音節 (syllabae) は、長く、他の音節は、短かかったのは、一方が、長い時間響き、他方が、短い時間響いたからではなかったのか」(第二十九節・第二十三章。p. 208, 8-9)。——「音節」の響く・「時間」の「長さ」(〈持続〉) をも、私たちは、「時間によって」「測って」、音節が、「長い」「短い」と言うのである——。

してみれば、おなじく、〈天体の運動〉の・「時間」の「長さ」(〈持続〉)をも、やはり、私たちは、「時間によって」  
「測る」のではないのか。

こうして、「時間」は、「運動」の・「時間」の「長さ」(〈持続〉)を「測る」(〈尺度〉)である。この理由でも、「時間」と「運動」とは、〈別個〉のものである。

(もとより、アウグスチヌスが、運動の・「時間」の「長さ」を、「時間によって」、すなわち、「時間」を〈尺度〉にして、「測る」、と言うのは、誤りである。「時間」の「長さ」は、「時間によって」は、「測られる」ことができない。「測られる」のは、運動の〈持続〉なのであり、「測る」(〈尺度〉)は、年、月、日、時、分、等々である)。

アウグスチヌスが、あの「学識ある人」の説に「同意しなかった」根拠は、上のところにある。

しかし、右に見たように、アウグスチヌスは、〈天体の運動〉であれ、ろくろの「運動」であれ、音節の「響き」という「運動」であれ、いずれについても、自分が問題にしているのは、「運動」の・「時間」の「長さ」ではなく、実は、「運動」の・〈持続〉の「長さ」であることに、気がつかなかつた。

それは、アウグスチヌスが、こう考えているからである。——たとえば、〈長い音節〉は、〈長い時間〉(正しくは、〈長い持続〉)の中に存在したのであり、〈短い音節〉は、〈短い時間〉(正しくは、〈短い持続〉)の中に存在した。しかるに、「音節」が「響く」のは、一つの「運動」であり、「運動」の〈要件〉は、「時間」である。してみれば、〈長い運動〉は、〈長い時間〉の中に、そして〈短い運動〉は、〈短い時間〉の中に、それぞれ存在した。そのことは、私たちが、「時間によって」、「運動」を「測って」、〈長い〉〈短い〉を言うことにほかならない。

はたして、アウグスチヌスは、つぎのように言う。「……私たちは、時間によって (tempus, quo)、物体の運動〔正しくは、運動の〈持続〉〕を、測り (metimur)、あの運動は、この運動よりも、たとえば、時間の上で (tempore)」、

二倍長い、と言う……」(第三十節・第二十三章。P・209、15―17)。

しかし、再び言えば、「測られる」のは、「運動」ではなく、「運動」の〈持続〉である。そして、その〈持続〉が、「時間によって」ではなく、時、分、等々によって、「測られた」時、〈持続〉が〈長い〉〈短い〉、あるいは、一倍、二倍が、言われうるのである。

しかしながら、そのアウグスチヌスも、本稿・後出Ⅱ―15、Ⅱ―18に見るように、いくたびかは、思わずも、「時間」とはことなるものとしての〈持続〉に、近づいていく。

## Ⅱ—13

本稿・Ⅲに見るとおり、ロックにあっては、「日」とは、〈天体の運動〉(「太陽の円環運動」)によって生み出される〈日の出〉(「太陽の昇り」という〈現われ〉が、「太陽の運動」全体の「持続」を〈区切った〉)ものであり、そして、その「日」が、われわれの観念なり、物体の運動なりの「持続」を〈区切って〉、それらの〈持続〉を「測る」《尺度》の一つとなるのであって、この「日」という《尺度》によって、「持続」を「測る」ことが、「時間」である。してみれば、ロックの場合、「日」と「太陽の円環運動」とは、〈不可分〉のものである。

アウグスチヌスもまた、さきに見たように、ひとたびは、〈天体の運動〉と「時間」との〈別個性〉を言いながら、しかし、「日」と、「太陽の円環運動」と、そしてその運動が生み出す〈日の出〉の円環との〈不可分性〉に、着目した。

いな、アウグスチヌスは、「日」と「太陽の円環運動」とは、〈不可分〉である、とするのみでなく、一方で、両者は、〈同一〉である、と言う。



「……日とは、地上を照らす太陽の停滞 (motra) であり、その停滞によって昼と夜との別がある、と言われるものであるばかりでなく、また、日とは、日の出 (origins) から日の出までの・太陽の円環運動 (ins [solis] circuitus) 全体とも言われるものであり、その円環運動によって、私たちは、『しかじかの日数が、移り過ぎて行った』というのである……」(第三十節・第二十三章。p・209、17—20)。——日の出から日の出までの・太陽の円環運動全体が、「日」と「言われる」のである。

ところが、他方で、アウグスチヌスは、「太陽の円環運動」と「日」とを、——〈不可分〉とはしながらも——しかし、〈同一〉のものではない、とするのである。「……ゆえに、日は、太陽の運動、すなわち、日の出から日の出までの円環運動によって、充たされている (explentur) のである……」(第三十節・第二十四章。p・208、22—23)。——「日」とは、「太陽の運動」が経過する・「時間」の「長さ」なのであって、それゆえ、「日」は、「太陽の円環運動によって、充たされている」のである——。

こうして、アウグスチヌスは、一方で、「日」を、「太陽の円環運動」と〈等置〉し、しかし、他方で、両者は、〈別個〉である、とする。

すなわち、「日」と「太陽の円環運動」とを〈不可分〉としながらも、アウグスチヌスは、右のいずれかであるのかを決定しかねたのである。

しかし、この〈不決定〉も、アウグスチヌスが、いまだ、〈持続〉という観念をもたず、したがって、「太陽の運動」自体の・全体の〈持続〉に想到せず、そしてまた、「日の出から日の出までの」——すなわち、「太陽の円環運動」が生み出す「日の出」という〈現われ〉の——「円環」が、「太陽の運動」全体の〈持続〉を〈区切った〉ものが、「日」であり、そして、その「日」が、観念のなり、物体の運動のなりの〈持続〉を〈区切る〉、ということに、

考えいたらなかったところに、帰因するのである。

さて、そこで、上の〈不決定〉と、しかし、右に述べた事柄の無自覚とから、アウグスチヌスは、つぎのように、誤って問題を立ててしまう。「探究されるべきは、日は、「太陽の」運動そのものであるのか、それとも、「日の出から日の出までに、太陽の」運動が経過する (peragitur)、時間の長さ (mora) そのものであるか、ないしは、日は、いずれでもあるか、という点である」(第三十節・第二十三章。p. 209, 23-24)。

そこで、(1) 「もし前者〔太陽の運動そのもの〕が、日であったのであれば」、太陽の「運動」は、「存在」するのであるから、「したがって、日は、存在したはずである」(第三十節・第二十四章。p. 209, 24-25)。——「たとえば、太陽が、一時間という (horæ unius) ・きわめて短い・時間の長さで、自らの軌道 (cursus) を経過したにしても、である」(第三十節・第二十三章。p. 209, 25-26)。(だがしかし、ということは、一「日」が、一「時間」へ、〈名称〉を交することであり、「日」は、「日」としては、〈消滅〉することである)。

(2) しかし、「もし後者〔太陽の運動が経過する「時間の長さそのもの」〕が、日であったのであれば」、すでに知ったとおり、すべての「時間」は、「長さ」をもたないのであるから、「したがって、日は、存在しなかったはずである」(第三十節・第二十三章。p. 209, 26-28)。——「たとえば、太陽の昇り (ortus) からつぎの昇りまでが、一時間という、きわめて短い・時間の長さであったとしても、である。しかし、太陽は、二十四回円環して、日を充たしたはずである」(第三十節・第二十三章。p. 209, 27-29)。すなわち、一「日」は、一「時間」としても「存在せず」、ただ、「二十四回」の・太陽の円環が「存在する」のみである——。

(3) また、「もし、日が、いずれでもあるのであれば」(第三十節・第二十三章。p. 209, 29)。

(a) 「日」は、一方では「存在する」にしても、しかし、他方では、「太陽の円環運動そのもの」であるから、「日」とは呼ばれなかったはずである」(第三十節・第二十三章。p・209、28)。——「かりに太陽が、一時間の・時間の長さで、自らの回転全体を円環したにしても、である」(第三十節・第二十三章。p・209、29—30)。(しかし、ということとは、再び言えば、一「日」が、一「時間」に、〈名称〉を変じたことにすぎない)。

(b) また、「日」が、太陽の円環運動の「時間の長さそのもの」であれば、上の(2)によって、「日」は、「存在しなかったはずである」から、これまた、「日とは呼ばれなかったはずである」(第三十節・第二十三章。p・209、29)。

(4) 「しかしまた、太陽がなくなったとすれば、太陽が朝から朝までの全周環(ambitus)を経過するのを常としているだけの時間〔二十四時間〕が、過ぎ去ってしまったにしても」(第三十節・第二十三章。p209、30)、「日」と〈不可分〉である「太陽の円環運動」が存在しないのであるから、やはりまた、「日」は、「日とは呼ばれなかったはずである」(第三十節・第二十三章。p・209、30—32)。

以上のようにして、「日」は、「存在する」にしても、「日とは呼ばれない」か、あるいは、「日」は、「存在しなかった」し、それゆえ、「日とは呼ばれない」のである。

こうして、「日」は、まことに「ありふれた日常事」であるにも拘らず、しかし、アウグスチヌスにとっては、「探究」によって、〈消滅〉してしまう。

しかし、〈消滅〉するのは、アウグスチヌスによる問いの立て方に、誤りがあったからである。

「日」とは、アウグスチヌスの言うのとはことなっていて、「太陽の円環運動全体」であるのでもなければ、太陽の運動が、「日の出から日の出まで」に、「経過する時間の長さ」であるのでもないのである。

この・設問の誤りは、くりかえせば、アウグスチヌスが、「太陽の運動」全体の〈持続〉に想いいたらず、「日

出から日の出までの」——すなわち、「太陽の円環運動」が生み出す・「日の出」という〈現われ〉の——「円環」が、「太陽の運動」全体の〈持続〉を〈区切った〉ものが、「日」であり、そして、その「日」が、観念のなり、物体の運動のなりの〈持続〉を〈区切る〉、ということに、考えいらなかったところに、発するのである。

こうして、アウグスチヌスは、〈持続〉の観念をもたぬことと相俟って、「日」を、事柄の〈持続〉を〈区切る〉ものとして、〈持続〉を「測る」《尺度》として、把握することに到達できなかった。

そのところに、アウグスチヌスが、いくたびかは、〈持続〉を「測る」という問題に、自覚せぬまま、近づきながらも、しかし、再び、「時間を、測る」という立論に落ち込んでしまう理由がある。

そのことは、しかし、アウグスチヌスが、一度は、「時間」を、《魂の働き》として、内面化して、とらえながら、しかし、ついに「時間とは、なにであるか」という自問に、答えることができなかった、ということにほかならない。

加えるに、上の(1)と、(2)と、(3)(a)とに、それぞれ付け加えて述べられているところから見れば、アウグスチヌスは、「日」が、「存在」せず、ないしは「日」とは「呼ばれない」にも拘らず、「一時間」は、「存在」する、と考えているのである。

しかし、一「日」は、アウグスチヌスにあっても、「二十四時間」であり、ということとは、一「時間(hora)」は一「日」の〈部分〉である、ということである。

とすれば、「日」が、〈消滅〉した場合に、いかにして、「時間(hora)」が、「存在」するであろうか。

実は、アウグスチヌスのいう一「時間」は、一「日」の〈別名〉にすぎないのであり、すなわち、アウグスチヌスは、依然として、「太陽の円環運動」によって生ずる「日の出から、つぎの日の出まで」の円環の「間隔」を、

一「時間」の名のもとに、一「日」として、とらえているのである。

こうして、アウグスチヌスにとって、〈消滅〉したのは、一「日」という〈名称〉のみであって、一「日」は、ひきつづき、一「時間」の〈名称〉のもとに、「太陽の円環運動」と〈不可分〉に、生き残っているのである。

それゆえ、アウグスチヌスにとって「探究」すべきものは、この・「太陽の円環運動」と一「時間」(とりもなおさず一「日」)との〈不可分性〉が、なにを意味しているか、ということである。

その場合には、アウグスチヌスとしては、もはや、「日」を、「太陽の円環運動」に〈解消〉させることはできず、また、「日」を、「太陽の円環運動」が「経過する時間の長さ」に、〈解消〉させることもできなかったはずなのである。そして、この「探究」に思いを凝らしたのが、ロックである。

とすれば、ロックは、アリストテレースが、「天体の・均等な円環運動」を、「時間」の考察の中に入れたことと、そして、アウグスチヌスが、「太陽の円環運動」と「日」(ないし「時間 (hora)」)との〈不可分性〉をとらえたこととを機縁に、本稿・Ⅲに見るような〈時間論〉を構築した、と言わなくてはならない。

## Ⅱ — 14

本稿・前節に見たように、アウグスチヌスにとって、「日」は、〈消滅〉した。ここから、こう述べられる。「それゆえ、いまや、私が探究しているのは、日と呼ばれるものは、なにであるか、ではなく、時間 (tempus) とは、なにであるか、である……」(第三十節・第二十三章。p. 209, 32—35)。

そして、アウグスチヌスは、つづけて言う。——「丁度、ろくろの回転(の〈持続〉)を、「時間によって」「測る」のとおなじく——「私たちは、時間によって (tempus quo), 太陽の円環運動(の〈持続〉)を測って、もし、太陽

の円環運動が、十二時間 (hora duodecim) が経過した・時間の長さで、経過してしまつたのであれば、太陽の円環運動は、いつもの (quam solet) 半分の・時間の長さで、経過した、と言つたはずであるし、また、太陽が、日の出から日の出まで、ある時には、一倍で、ある時には、二倍で、円環した、と仮定すれば、私たちは、両方の時間〔〈持続〉〕を比較して、あの円環は一倍、この円環は二倍、と言つたはずである」(第三十節・第二十三章。p. 209、33—39)。

しかしながら、第一に、「十二時間が経過した・時間の長さで、経過した」のは、「太陽の円環運動」そのものではなく、「太陽の円環運動」の〈持続〉である。いま、アウグスチヌスは、まさに、その〈持続〉を、「時 (hora) によって」「測つて」、「十二時間 (hora)」と言っているのである。

「時間 (tempus) によって」、「時間 (tempus) を比較する」ことは、〈できない〉。

また、「時間 (tempus) によって」、運動の〈持続〉を「測る」ことも、〈できない〉。

事柄の〈持続〉は、「時」等々によって、「測られる」のである。

第二に、しかしながら、「日」が、〈消滅〉し、「探究」の対象からはずされたのに、どうして、「十二時間」を言うことができよう。

「時間 (hora)」は、「日」の〈部分〉である。アウグスチヌスが、「十二時間」と言い、「いつもの」半分の・時間の長さで、と言うこと自体、「太陽の円環運動」は、「日」と〈不可分〉であることを、認めているものである。「日」は、依然として、「探究」の対象として、残っているのである。

さらにまた、アウグスチヌスは、ここで、再び、「なんびとも、私にむかって、天体の運動が、時間である、と

言っではならない」とし(第三十節・第二十三章。p. 209, 39-40)、その理由を、こうしている。「なぜなら、ある人(「ヨシユア」)の願いによって、戦いを勝利に終らせるために、太陽が凝然として不動のものとなった時にも、太陽は、凝然として不動のものとなったが、しかし、時間(tempus)は、流れて行ったからである。もとより、勝利の戦いに充分な・その時間の長さ(spātium temporis)の間に、かの戦闘は、行なわれてしまったのであり、そして終ってしまったのである」(第三十節・第二十三章。p. 209, 40-43)。これは、旧約聖書『ヨシユア記』第十章・第十二―第十三句を、念頭においた叙述である。すなわち「一二。エホバ、イスラエルの子孫の前に、アモリ人を渡したまいし日に、ヨシユア、エホバにむかいて申せしことあり。すなわち、イスラエルの目の前にて言いけらく。日よ、ギベオンの上にとどまれ。月よ、アヤロンの谷にとどまれ。十三。民、その敵を撃ちやぶるまで、日は、とどまり、月は、とどまりぬ。これは、ヤシャルの書に記さるるにあらざや。すなわち、日、中天に動かずして、没らざること、およそまる一日なりき」。

アウグスチヌスは、上のように言う時、つぎの論理に立っているのである。――「時間」は、「戦闘」という「運動」の〈要件〉である。したがって、「太陽が、凝然として不動」であったにしても、「戦闘」が行なわれたことは、「時間が、流れて行った」ことにほかならない。ゆえに、「天体の運動」は、「時間」であるのでは〈ない〉――。

ところで、アウグスチヌスは、勝利の戦いに充分な「時間の長さ」と言っている。これは、〈時間が、流れて行った〉以上、その・流れた「時間」は、「長さ」をもつ、と考えたからである。

だがしかし、「太陽が、凝然として不動のものとなった時」に、どのようにして、「時間の長さ」を、『ヨシユア記』の言葉をもってすれば、「まる一日」を、言いたであらうか。

なぜなら、かりに、「太陽が、凝然として不動のもの」であり、つづけたとすれば、その時には、「まる一日」

は、言いいない事柄であることは、明らかであり、そして、「まる一日」が存在しなければ、「時間の長さ」については語りえないのである（また、「一日」が存在しなければ、そのの〈部分〉である時、分も言いいないのであるから、これまた、「時間の長さ」について語ることはできない）。

ということとは、もしかりに、常に「太陽が、凝然として不動のもの」でありつづけたとすれば、そもそも、「時間」については、語るができない、ということである。

ここで、アウグスチヌスは、一つには、ただ、「太陽の円環運動」があつた場合にえられた「まる一日」ないし「時間の長さ」を、この「戦闘」の〈持続〉に、〈適用〉しているにはかならない。

二つには、アウグスチヌスが、「時間は、流れて行った」と言うのは、「戦闘」が、〈持続〉した、ということの思い誤りである。

アウグスチヌスは、〈持続〉の観念をもたぬところから、依然として、「時間」と〈持続〉とを、混同しているのである。

この混同は、アウグスチヌスの心が、「延長」の語のもとに、〈持続〉の観念に近づきながらも、今度は、「時間」と「延長」（〈持続〉）とを同一視する、というところにも、現われている。上にひきつづいて、こう言われている。「ゆえに、私は知るのである、時間とは、ある延長 (quaedam distentio) である、と」(第三十節・第二十三章。p・209、43)。(このところから、私に知られているのは、時間とは、延長以外のなものでもない、ということである) (第三十三節・第二十六章。p・211、19―20)。「みよ、わが生涯は、延長である」(第三十九節・第二十九章。p・214、2)。



このように、アウグスチーヌスが、〈持続〉の観念をもたず、そのために、「時間」と〈持続〉とを混同し、したがって、「測る」ものと、「測られる」ものとの区別を見失ったところから、そしてまた、「延長」の語のもとに、〈持続〉の観念に近づきながらも、〈持続〉を「測る」ものとして、「日」を、それゆえ、〈時、分〉等をも、〈消滅〉させているところから、つぎのことが出てくる。

それは、アウグスチーヌスが、しばしば、「この時間は、二倍、ないし三倍である。あの時間は、一倍である」とか、あるいは、「この時間と、あの時間とは、ひとしい、と答える」等々と言ひ、すなわち、「時間の長さ」を言いながら、しかし、その「時間」(正しくは〈持続〉)は、へなによって測られて、一倍、二倍、三倍等々の「長さ」と言われるのかを、語ることができない、ということである。

これを語ることができないからこそ、つぎの叙述が出てくる。「ところで、……私が、ただ (tantummodo)、長い時間 (longum tempus) である、と示すだけであつて、しかし、どれほど長く (quantum longum) かを、示さないにしても、私たちは、同時に、どれほどの長さかをも (et quantum longum cum) 言ひ、いふのであるから、私たちは、比較によって、たとえば、『この時間と、あの時間とは、ひとしい』あるいは、『この時間は、あの時間に比較して、二倍である』、と言うのであり、また、ほかの・どのような時間についても、この仕方によるのである」(第三十一節・第二十四章。p・210、8—11。傍点は、引用者)。

だが、第一に、「どれほどの長さかを、示さないにしても、私たちは、同時に、どれほどの長さかをも、言つているのである」という立論が成立しえないことは、いうまでもない。

第二に、ここで、アウグスチーヌスが述べているのは、ただ、二つの「時間」(〈持続〉)の「長さ」が、「ひとしい」、ないし「二倍である」ということだけであつて、アウグスチーヌスは、そのことを、〈一つ一つ〉の「時間」(〈持続〉)

の「長さ」が、「どれほど (quantum)」であるかを言うことにすりかえているのである。

そして、たとえ、「時間」のもとに、「延長」(〈持続〉)を考へるにせよ、しかし、「日」を〈消滅〉させ、したがって、「日」の〈部分〉である〈時、分〉等をも〈消滅〉させたことになるアウグスチヌスには、〈一つ〉の〈持続〉の「長さ」を「測る」ことは、不可能である。

## II — 15

しかしながら、〈持続〉と「時間」とを混同してきたアウグスチヌスも、上に見たように、「時間」とは「延長」である、という規定を契機に、次第に、しかし、自覚せぬまま、〈持続〉(も)とも、あくまでも、「時間」によって、測られる」ものとしての( )の觀念に、迫ってくる。

「物体が運動する時、私は、その物体が、運動し始めてから (ex quo moueri incipit)、運動し終るまで (donec desinat)、どれほど長く (quandiu)、運動するかを、時間によって (tempore)、測る……」(第三十一節・第二十四章。P・210、4—5)。「物体が、「運動し始めてから、運動し終るまで」、すなわち、「運動」の「どれほど長く」が、「時間」によって「測られる」——。(この「どれほど長く」が、ロックの言う・「運動」の)「持続」である。なぜなら、それは、物体の運動が〈存在し始めた〉状態から、〈存在を終った〉状態までの「距離」であるからである)。

いな、アウグスチヌスは、さらに言う。「また、私が、物体が運動し始め、そして、運動しつづける (perseuerat) のを、見てしまわず (non uidit)、それゆえ、運動が終る時を、見ない (non uideam) のであれば、私は、「時間」によって、運動の「どれほど長く」(〈持続〉)を、「測ることができない。もとより、私が、見始めて (ex quo uidere incipio) から、見終るまで (donec desinat) を、見てしまえば、別であるが」(第三十一節・第二十四章。P・210、

アウグスチヌスは、ここで、一つには、さきほど見た「どれほど長く (quandū)」から、さらに進んで、「運動しつづける (perseuerat mōvēr)」という語を用いて、自らが、「運動」の〈持続〉を語っていることを、示しているばかりでなく、二つには、「私が、見始めてから、見終るまでを、見る」という・〈知覚・観念〉の〈持続〉についてさえ、述べているのである。

そして、であればこそ、アウグスチヌスは、「ところが、私たちが、空間の拡がり (locōrum spātia) を知覚する (notāre) ことができたとし、運動する物体なり、その部分なりが、どこから、どこへ行くのかを、知覚することができたとすれば、その物体が、いわば曲線をなして運動するにしても、私たちは、あの位置からあの位置への・物体のなり、その部分のなりの運動が、行なわれてしまったことに基づいて、どれほどの量の時間 (〈持続〉) が存在するのかわ、言うことができる」、としたあとで、「こうして、物体の運動と、そして、物体の運動 (の〈持続〉) がどれほどの長さであるのかを (quandū sic) ことによって私たちが測る (quō mētūm) もの [時間] とは、互いに別個のもの (aliud... aliud) なのであるから、両者のいずれが、むしろ、時間 (tēmpus) と言われるべきかを、理解しない者がいるであろうか」と述べるにいたるのである (第三十一節・第二十四章。p. 210, 11—17)。

——すなわち、物体の運動の・「知覚」された「どれほどの長さ」、**「運動しつづける」〈持続〉を、「測る」ものが、「時間」であって、〈持続〉と「時間」とは、「別個」のものであり、混同されるべきではないのである——。**

このようにして、もとより、ひきつづき、「時間によって、測る」という立場をとりつづけながら、しかし、〈持続〉に迫ったからこそ、アウグスチヌスは、また、物体の〈静止〉 (の〈持続〉) を言い、これを、「時間によって測る」と述べることができる。「……物体は、ある時には、さまざまに運動し、ある時には、凝然として不動である

「静止している」にしても、私たちは、その物体の運動「の〈持続〉」ばかりでなく、また、凝然たる不動「静止」の「の〈持続〉」をも、時間によって測る (tempore metimur) のであり、そして、『凝然として不動であった間 (Tan-tum) と、運動してしまった間 (quantum) とは、『ひとしい』とか、『運動してしまった間にくらべて、二倍ないし三倍、凝然として不動であった』と言っているのであって、そして、私たちの測定 (dimensio) は、ほかの・どのようなものをも、とらえ、あるいは、測定することであろうし、その結果、大小が言われるのが常なのである」(第三十一節・第二十四章。p・210、17―23)。

こうして、物体の「運動」の〈持続〉を、「時間によって、測る」という立場に立ったアウグスチヌスは、それゆえ、また、〈静止〉の〈持続〉をも、「時間によって、測る」と言うことができ、そして、いまはもはや、「時間」が、ひとしい、とか、二倍・三倍である、とか言わずに、〈持続〉の「間」を語り、「時間によって、測って」、その「間」の「大小」を言うのである。

それゆえ、アウグスチヌスが、右につづいて、「ゆえに、時間は、物体の運動ではない」と言う時(第三十一節・第二十四章。p・210、22―23)、それは、物体の運動の〈持続〉が、「時間」ではない、という意味を含んでいるのである。

(ロックは、おそらく、アウグスチヌスの・上見の叙述から、「持続」という概念を学んだものであろう。

だがしかし、ロックにあっては、事柄の「持続」を「測る」《尺度》は、アウグスチヌスの場合とことなり、「時間」であるのではなく、年、月、日、時、分、等々であって、「持続」をかかると「測る」こと、かかると「尺度」のもとに、「考察する」ことが、初めて、「時間」である)。

くりかえしていえば、アウグスチヌスは、上に見たように、〈持続〉に近づいたとはいふものの、「日」を〈消

滅」させ、したがって、〈時、分〉等をも「消滅」させている以上、「運動」と「静止」との〈持続〉を、「測る」とは、アウグスチヌスにとって、不可能の事柄である。

## II — 16

だが、ひとたびは、〈持続〉に迫り、そして、事柄の〈持続〉を、「時間によって、測る」という立場に近づいたアウグスチヌスも、再び、「時間を、測る」という考えに立ち戻ってしまう。

「主よ、私は、汝に告白する。自分は、いまだ、なにが時間であるのかを、知らない、と。しかし、主よ、却って、私は、汝に告白する。自分が、そのことを時間の中で、言っている、ということをも、また、自分が、すでに長い間(die)、時間について語っている、ということをも、そして、長い間そのものは、時間の長さ(mōtia temporis)でなければ、長い間ではない、ということをも、知っている、と」(第三十二節・第二十五章。p・210、1—4。傍点は、引用者)。「わが魂は、汝にむかい、真実を告げる告白によって、私が、時間を測っていることを、告白しているのではないか。わが神よ、私は、まことに測っているのであり、しかし、私が、自分がなにを測っているのかを、知らないのである。私は、物体の運動を、時間によって、測る。おなじように、時間そのものを、測るのではないか」(第三十三節・第二十六章。p・211、1—4。傍点は、引用者)。

このように、またしても、「時間そのもの」を測る、と言い出すのは、アウグスチヌスが、——「時間」は、「運動」の〈要件〉であり、それゆえ、「運動」(の〈持続〉)を「測る」ことは、運動の〈要件〉である「時間」を「測る」ことにほかならない——と考えているからであって、はたして、こう言われる。「それの中を物体が運動する時間を、私が測ったのでなくて、どうして、物体の運動が、どれほどの長さで(bumdiu)あるか、また、どれほど長

さで、ここから、あそこへ到達するかを、測ったことになるであろうか」(第三十三節・第二十六章。p・211、4-6。傍点は、引用者)。

だが、「運動」の〈要件〉である「時間」を、「測る」、ということとは、予め、「時間」が、「測られる」べき「長さ」をもつことを、想定している立論である。

しかしながら、これまでの・アウグスチヌス自身の叙述によれば、いかなる「時間」も、「長さ」をもたないのであった。

「長さ」をもつのは、〈持続〉と、そして、〈持続〉を〈区切った〉ものとしての年、月、日、時、分、等々のみである。

アウグスチヌスとしては、年、月、日、時、分、等々の・「長さ」をもつものを《尺度》として、〈持続の長さ〉を「測る」と言うべきであったのである。

そして、「時間」に「長さ」がない以上、「時間」を「測る」ことは不可能であり、それゆえ、アウグスチヌスの言うのとはことなつて、「運動」の〈持続〉を「測る」ことが、ただちに、「運動」の〈要件〉である「時間」を「測る」ことである、とは立論しえないのである。

## II — 17

「時間を、測る」とするアウグスチヌスは、当然、以下に見る・数々の難問に、直面する。

第一に、「時間」を、「どのようにして」、すなわち、〈なに〉を《尺度》にして、「測る」のか、である。「してみる」と、私は、時間そのものを、なにによって (inde)、測るのであるか」である (第三十三節・第二十六章。p・211、

6)。

なるほど、「……私たちは、短い音節の・時間の長さによって、長い音節の・時間の長さを、測り、そして、後者は、二倍である、と言うようである。それとおなじく、私たちは、詩の・時間の長さを、詩句の・時間の長さによって、詩句の・時間の長さを、脚韻の・時間の長さによって、脚韻の・時間の長さを、音節の・時間の長さによって、長い音節の・時間の長さを、短い音節の・時間の長さによって、測るのである」、とも考えられる(第三十三節・第十六章。p・211、9―11)。

しかしながら、この方法は、一つには、「……短い時間によって、長い時間を、あたかも、肘の長さによって、梁の長さを測るように、測る……」ものであって(第三十三節・第十六章。p・211、6―7)、所詮、「空間を測る」方法であるにすぎない(第三十三節・第十六章。p・211、1―2)。

なぜなら。「肘の長さ」「梁の長さ」は、それぞれ、「空間」上の長さであり、それゆえ、〈固定したものである〉、〈流れ去るもの〉ではない。しかるに、たとえば、「長い音節」の「時間」も、「短い音節」の「時間」もある以上は、〈絶えず、流れ来たり、流れ去るもの〉であって、〈固定したものである〉ではない。それゆえ、「長い音節の・時間の長さ」を、「短い音節の・時間の長さ」によって、測る、ということは、〈絶えず、流れ去るもの〉としての「時間」を、〈固定したものである〉と見なすことであるからである。

「時間を、測る」という立場に立つ以上、アウグスチヌスとしては、まず第一に、この理由で、右の方法を斥けざるをえない。

二つには、「……短い詩句も、引き伸ばされて発音されるならば、縮められて発音された時の・長い詩句よりも、多くの・時間の長さにわたって響くようにされる……」からである(第三十三節・第十六章。p・211、17―19)。詩

句の「時間の長さ」(〈持続〉)は発声・発音の中にある。発声の仕方のいかんによって、「短い詩句」と「長い詩句」との区別は、失われるのである。

第三に、「…音声」(の「時間」)は、発音されることによって、飛び去って行く……」(第三十三節・第二十六章。P・211、13)ものである。それゆえ、短い詩句・音節であっても、その発声の「時間」の〈始まり〉と〈終り〉とを、〈同時に〉心がとらえることはできない。そして、それができなければ、「短い」詩句・音節のそのものについてさえ、「時間の長さ」を「測る」ことは、不可能である。

以上の・三つの理由で、「しかし、このような・やり方もまた、時間の・確実な測り方である、とは理解されない……」として、斥けられる(第三十三節・第二十六章。P・211、16―17。傍点は、引用者)。

しかし、見られるとおり、アウグスチヌスは、「時間を、測る」と言いながら、思わずも、「音節」「脚韻」「詩句」「詩」が発音される「音声」の・〈持続〉の〈長さ〉を、「測る」ことを問題にしているのであって、上の難問は、実は、〈時、分〉等の《尺度》をもたぬアウグスチヌスにとって、〈持続〉を「測る」ことの困難さにはかならない。

すなわち、〈持続〉を「測る」ことは、〈持続〉の観念を明確にもった上で、〈持続〉を、〈年、月、日、時、分、等〉によって「測る」という立場に立たない限り、不可能な事柄なのである。

さて、アウグスチヌスが逢着する・つぎの難問は、こう語られる。「私は、時間、を、測っている。それは、私も知っている。しかし、私は、存在するであろう時間を、測っているのではない。なぜなら、それは、いまだ存在していないからである。私は、現在している時間を、測っているのではない。なぜなら、それは、なんらの・時間の長さにも拡がっていないからである。私は、過ぎ去ってしまった時間を、測っているのではない。なぜなら、それは、すでに存在していないからである。では、私は、なにを、測っているのか」(第三十三節・第二十六章。P・211、



24—26。傍点は、引用者。

この・難問は、これまた、アウグスチーヌスが、「時間」と〈持続〉とを混同しているところから、生じているのである。すなわち、〈持続〉を「測る」と考えるべきところを、「時間」を「測る」と取りちがえたればこそ、〈測られるべき〉「時間」は、すべて、「長さ」を失って、アウグスチーヌスのまえに、現われるのである。

ところで、ここで、再び、「私は、過ぎ去ってしまった時間を、ではなく、過ぎ去って行く時間を、測っているのである……」と言われるかも知れない(第三十三節・第二十六章。p・211、26—27)。

なぜなら——「たとえば、身体の音声(音)が、響き始め、響いており、まだ響き、そして、みよ、音声はやむ。すでにしてあるのは、静寂であり、あの音声は、過ぎ去ってしまったのであって、すでに音声は、存在しない」(第三十四節・第二十七章。p・211、3—5)。

——たしかに、響いてしまった音声(音)の「時間」は、「すでに存在しない」がゆえに、〈測られることはできない〉。響く前にも、音声(音)の「時間」は、「いまだ存在しない」がゆえに、〈測られることができなかった〉。だがしかし、「してみれば、響いた時、その時に、音声(音)の「時間」は、測られることができたのである。なぜなら、その時には、測られることのできる音声(音)の「時間」が、存在したからである」(第三十四節・第二十七章。p・212、7—8)。

しかし、その音声(音)の「時間」が、はたして、「測られることができた」であろうか。いな、である。というのは、「けれども、その時にも、音声(音)の「時間」は、凝然として不動のものではなかった。なぜなら、音声(音)の「時間」は、流れて行き、過ぎ去って行ったからである」(第三十四節・第二十七章。p・212、8)。

すなわち、まず、「まだ響いているにしても、測られることができるとは、音声(音)が響き始めた・音声(音)の「時間」の始まりから、響き終る・終りまでが、測られる、という以外のものではない。いうまでもなく、私たちは、ある始

まりから、ある終りまでの間隔 (intervalum) そのものを、測るのである」(第三十四節・第二十七章。p・212、15—17)。

してみると、一方で、「流れて行く」音声(の「時間」)は、へいまだ終ってしまったのではなく、そして、「……いまだ終ってしまったのではない音声」(の「時間」)は、測られることができない……」のである(第三十四節・第二十七章。p・212、17—18)。

そしてまた、他方、音声(の「時間」)は「測られることができない」うちに、「過ぎ去って行った」のであり、〈終ってしまった〉のであって、「終ってしまった時には、音声(の「時間」)は、すでに存在しなくなる」(第三十四節・第二十七章。p・212、20—21)。

そして、〈すでに存在しなくなった〉音声(の「時間」)は、「測られることができない」。「してみると、音声(の「時間」)は、いかにして (quo pacto)、測られることができるようになるというのであろうか」(第三十四節・第二十七章。p・212、21)。

こうして、「過ぎ去って行く時間」であれ、それを、「測る」こともまた、できないのである。

しかし、右に見るように、アウグスチヌスは、またしても、「音声」の響く「時間」を、ではなく、実は、「音声」の〈持続〉を、「いかにして」、「測る」か、ということをも、問題にしているのである。

だが、「音声」の〈持続〉を、「測る」ことは、まず、「音声」が響き「始めてから」、響き「終る」までの「間隔」を、ロックのように、「持続」の観念のもとに確定するのでなくては、不可能である。

右の困難は、アウグスチヌスが、音声の〈持続〉を、「過ぎ去って行く時間」と同一視したところから、生じたのである。

ところで、アウグスチヌスが直面する難問は、なお、つぎのところにある。——すでに見たように、「私は、時間を、測っている」にしても、「存在するであろう時間」すなわち「いまだ存在しない時間」を、「測っている」のもなければ、「過ぎ去ってしまった時間」「すでに存在しない時間」を、「測っている」のでもなく、また、「現在している時間」「なんらの・時間の長さにも拮がっていない時間」を、「測っている」のでもなければ、「過ぎ去って行く時間」すなわち「流れて行く」時間を、「測っている」のでもなく、そして、もちろん、「終極をもたない時間を、測っているのでもない」(第三十四節・第二十七章。p・212、21—25)。「にも拘らず、私たちは、時間を、測っているのである」(第三十四節・第二十七章。p・212、21、25)。

——たとえば、「*Déus creator omnium* 「万物ノ創造主ナル神」」。この句は、八つの音節、短い音節と長い音節とで、交替する。すなわち、短い音節は、四つ、第一、第三、第五、第七であり、これらは、四つの・長い音節、第二、第四、第六、第八に比すれば、一倍である。後者の・一つ一つの音節は、前者の・一つ一つの音節に比して、二倍の時間をもっているのである」(第三十五節・第二十七章。p・212、26—30)。

——私は、このように、「二倍」という〈時間の長さ〉を、「測っている」のであり、「私は、発音して、それを示すのである」(第三十五節・第二十七章。p・212、30)。

——しかし、では、へいかにして、その「二倍」という〈時間の長さ〉を「測る」ことができるのであるか。それは、その〈時間の長さ〉が、「……明瞭な感覚作用 (*sensus manifestus*) によって、感覚される (*sentitur*) ……」からである (第三十五節・第二十七章。p・212、31)。

——こうして、「感覚作用が明瞭である限り、私は、短い音節によって、長い音節を、測っている」のであり、そして、長い音節が、二倍の量をもっていることを、感覚する (*sentio*) ののである」(第三十五節・第二十七章。p・212、

31—32)——。

しかしながら、ここには、まず一つには、——「私は、どのようにして、短い音節〔の・時間の長さ〕を、とらえるのであるか」(第三十五節・第二十七章。P・212, 34)、すなわち、長い音節の〈時間(持続)〉の長さの基準となる・短い音節の〈時間(持続)〉の長さの自身を、へなにによって、測るのであるか——という困難がある。

すなわち、「明瞭な感覚作用」によるならば、たしかに、長い音節の〈時間(持続)〉の長さの、短い音節の〈時間(持続)の長さ〉の「二倍」であると、「感覚する」ことはできる。だがしかし、短い音節の〈時間(持続)〉の長さの、それ自体を、「どのようにして」、「測る」のであるか、である。

この困難は、重ねていえば、アウグスチヌスが、〈時間〉と混同していることと、その上、〈持続〉を「測る」《尺度》(「日」の〈部分〉)としての〈時、分〉等を、確定しなかったこととに、発するものである。

さらに、ここには、二つには、——「短い音節が、響きをやめたのでなければ、長い音節は、響き始めない……」(第三十五節・第二十七章。P・212, 35—36)のであるから、長い音節の〈時間の長さ〉と比較される・短い音節(の「時間」)は、私が長い音節と比較しようとする時には、「すでに存在していない」のであって、「すでに存在していない」ものの、すなわち、短い音節の「時間」の、〈長さ〉は、〈測られることができない〉——という困難がある。そもそも、私が測る基準である「短い音節」の「時間」は、どこに存在しているのであるか」(第三十五節・第二十七章。pp・212—213, 38—39)。

この困難もまた、アウグスチヌスが、〈測られるべきものを、音節の〈持続〉ととらえず、〈時間の長さ〉としたところから、生じてきたのである。なぜなら、音節の短さが、「時間」の短さであるならば、それは、長い音節が響く時には、もはや「存在しない」からである。

さらに、第三の困難は、つぎのものである。——「また、長い音節（の「時間」）そのものにしても、それが〔響き〕終ったところで測るのでなくて、はたして、私は、それ〔長い音節の「時間」そのもの〕を、現在しているものとして、測っているであろうか〔PLでは、「測らないであろうか」〕。しかるに、長い音節（の「時間」）の終りとは、長い音節（の「時間」）が、過ぎ去ってしまったことである」（第三十五節・第二十七章。p・212、36—37）。

——ところで、「過ぎ去ってしまった」長い音節の「時間」は、「測られることができない」。「私が測る・長い音節は、どこに存在するのであろうか」（第三十五節・第二十七章。p・213、39）——。

この困難もまた、もとより、アウグスチヌスが、長い音節の「長さ」を、〈持続〉の「長さ」と考えずに、「時間」の「長さ」としたところに、原因をもつ。すなわち、「〔響き〕終った」・長い音節の〈持続〉が、〈時間〉とされるところから、それは、「過ぎ去ってしまった時間」となり、「すでに存在しない時間」となるのである。

こうして、アウグスチヌスにとっては、〈時間の長さ〉としての・短い音節も、長い音節も、ともに、〈存在しない〉ことになる。

この困却は、つぎのように述べられる。「どのようにして、私は、短い音節を測りながら、長い音節にあてはめて、後者が二倍であることを、見いだすのであろうか」（第三十五節・第二十七章。p・212、34—35）。「してみると、私が測るものは、なにであるのか」（第三十五節・第二十七章。p・212、38）。「なぜなら、両者〔短い音節と長い音節〕ともに、響いてしまい、翔け去ってしまい、過ぎ去ってしまったのであって、もはや存在していないからである」（第三十五節・第二十七章。p・213、39—40）。——〈測られるもの〉が、「存在しない」のである。どうして、「測る」ことができようか。

また、くりかえして言われる。「なるほど、私は、測るのであり、修練を積んで感覚能力に信をおく限り、私は、

確信をもって、時間の長さにあつて、短い音節は一倍、長い音節は二倍と、答えるのである。だがしかし、このことも、両者が、過ぎ去ってしまい、「響き」終ってしまったからでなければ、私には、することができないのである」(第三十五節・第二十七章。p. 213, 40-43)。

アウグスチヌスは、いまや、たとえば音節の〈時間の長さ〉を、すなわち「時間」を、「測っている」のであり、しかし、同時に、「測る」ことは「できない」、という矛盾の中に立たされた。

この矛盾は、くりかえせば、アウグスチヌスが、〈持続〉と「時間」とを同一視し、すなわち、音節の響く〈持続〉の観念を、明確にもたず、それゆえ、〈持続の長さ〉と考えるべきところを、〈時間の長さ〉としたところに、原因をもつのである。

すべての「時間」は、「長さ」をもたない。〈持続〉が「時間」と混同されている以上、アウグスチヌスとして、「測られる」ものを見失ったのは、当然である。

しかし、重ねていえば、*Dés créator omnium*. の句の発音を形づくる〈連結した音節〉——感覚内容・観念の〈連結〉——の中にある〈持続〉、*dé:s*をとれば、*e*と*s*との観念の間の「距離」としての・*e::s*という観念の「持続」、*lrea:tor*をとれば、*e*と*t*との観念の間にある「距離」としての・*e::t*という観念の「持続」、あるいは、*dé:s*の*p*と*u*という観念と、*o:mnium*の最後の*y*という観念との間にある「距離」としての・諸感覚内容・観念の「持続」を、ロックに教えたのは、アウグスチヌスである、と言えよう。

〈持続〉を「測る」という問題を抱きながらも、それを自覚せずに、「時間を、測る」としたために直面した・以上の・数多くの難問を、しかし、アウグスチヌスが脱け出す道は、いったい、どこにあったのか。

本稿・前出Ⅱ——10に見たとおり、アウグスチヌスは、「すでに存在していない」「過ぎ去ってしまった時間」の中にあつた「事柄」、すなわち「過ぎ去ってしまった」「すでに存在しない事柄」を、しかも、「物語る」ことができ、という困難を、「過ぎ去ってしまった」「すでに存在しない時間」は、「魂」の〈働き〉であると、言いかえれば、「過ぎ去ってしまった事柄についての・現在している記憶」であることに、脱出し、また、「いまだ存在していない」「存在するであろう時間」を、やはり、「魂」の〈働き〉とし、「存在するであろう事柄についての・現在している期待」であることに、アウグスチヌスは、「いまだ存在していない」「存在するであろう時間」の中に存在する事柄、すなわち「いまだ存在していない」「存在するであろう事柄」について、なお、「予告・予告」しうる、という困難を、脱出した。

いま、「時間を、測る」とするがゆえに、数々の難問の中に立たされたアウグスチヌスは、〈測られる時間〉を、上とひとしく、「魂」の〈働き〉に帰して、これらの難問を逃れ出る。「してみると、私は、すでに存在していない・短い音節、長い音節〔の・時間の長さ〕そのものを、測っているのではなく、私の記憶(memoria)の中にある・あるもの、〔記憶に〕刻み込まれてとどまっている・あるもの(aliquid...quod infixum manet)を、測っているのである」(第三十五節・第二十七章。p・213、43―45)。「わが魂よ(animus meus)、私は、汝の中で、時間を、測っているのである」(第三十六節・第二十七章。p・213、46)。

では、私の「魂」の「記憶の中に刻み込まれてとどまっている・あるもの」とは、なにであるのか。それは、「修練を積んで感覚能力」によってとらえられたもの、——すなわち、「過ぎ去ってしまった」「すでに存在しない」音

節・音声が、「魂」に刻みつけた〈刻印〉・〈感じ〉であり、「記憶内容」(観念)——である。「くりかえして言う、私は、汝〔魂〕の中で、時間を、測っているのである。過ぎ去って行く事柄が、汝の中につくり出していく感じ」(p. 21)。刻印)」、そして、その事柄が過ぎ去ってしまったにしても、汝の中にとどまっている感じ、この・現在している感じの方を、私は、測っているのであって、その感じが生ずるために過ぎ去ってしまった事柄〔音声〕の方を、測っているのではない。私が、時間を、測る時、私は、その感じそのものを、測っているのである」(第三十六節・第二十七章。p. 213, 48—51)。

いまや、「時間を、測る」とは、この「感じを、測る」ことである。

がしかし、〈測られる〉のは、正しくは、「記憶」の中にある「感じそのもの」ではなく、「魂」の中にある「感じ」(観念)の〈持続〉である。

はたして、アウグスチヌス自身、こう言っている。「このところから、私にわかっているのは、時間とは、延長(distentio)以外のなものでもない、ということである。しかし、いかなる事柄の延長であるのか、私は知らない。けれども、魂そのものの延長」(distentio) (ipsius animi) でなければ、不可解である」(第三十三節・第二十六章。p. 211, 19—21)。

そして、「魂の延長」すなわち、〈観念〉の〈持続〉を、「測る」のであればこそ、こう言われるのである。

「……音声がやみ、口が閉じられても、私たちは、詩・詩句〔の〈持続〉〕を、また、どのような話し〔の〈持続〉〕をも、思考することによって(cogitando)、「発声」運動〔の〈持続〉〕の・どのような測定(dimensiones)をであれ、成就するのであり……」(第三十六節・第二十七章。p. 213, 56—58)。

——すでに発音され終った詩句、「記憶」の中にありそれゆえ「感じ」〈観念〉である詩句の・〈持続〉の〈長さ〉を、



「思考すること」、それが、その〈観念〉の〈持続〉の〈長さ〉を、「測定する」ことであり、それが、とりもなおさず、その詩句を発音した「運動」の〈持続〉の〈長さ〉を、「測定」することである——。

かつて、音声の〈持続〉を、「時間」と同一視しつつ、音声そのものを測ろうとしたからこそ、音声の〈持続〉は、「時間」となって、〈測られる時間〉は、存在しなくなった。

いま、アウグスチヌスは、音声の「記憶」に着目し、この記憶を、「魂の延長」とすることによって、再び、〈持続〉の観念に近づいてきたのであり、そして、〈記憶内容・観念〉を「思考する」ことを、〈持続〉を「測る」こととしているのである。

アウグスチヌスが、〈持続〉の観念に近づいてきたことは、〈観念〉としての諸音節が、もともとは、さきにあげられた例によれば、*Deus creator omnium* の句を構成する諸音節として、「連続した・間断のない進行をなして (*continuatō tenore sine ūlia distinctione*)」(第三十四節・第二十七章。p. 212, 12)、すなわち、「音節が、相次いで (*altera post alteram*) 響く」もの(第三十五節・第二十七章。p. 212, 33)、すなわち、ロックの言う・「連続した」**「連結」**の中にある〈感覚内容〉であったものであり、それゆえ、〈観念〉自身もまた、〈持続〉の中にある、ということによって、知られる。

とはいえ、しかし、「詩・詩句」の〈持続〉を、……思考することによって、「発声」運動「の〈持続〉」の・どのような測定をあれ、成就する……」という立論が、成立しうるであろうか。

いな、である。「思考することによって」のみでは、〈持続〉を「測る」ことはできない。なぜなら、「思考する」さいに、〈時、分〉等の《尺度》がなければ、〈持続〉を「測る」ことは、不可能であるからである。

すなわち、右のような《尺度》がなくては、いかに「思考」しても、魂の中に「記憶」されている「感じ」の〈持

統」を「測る」ことは、できないのである。

けれども、上に見たように、またはや、〈持続〉の觀念に近づき、〈持続〉を「測る」ということに迫ってきたからこそ、アウグスチヌスは、〈沈黙〉の〈始まりから終りまで〉の〈間隔〉について語ることができ、〈沈黙〉の〈持続〉を測ることを、問題にすることができるのである。

「私たちが、沈黙〔の〈持続〉〕を測る時、そして、あの沈黙は、あの音声が占めたのとおなじだけの時間〔〈持続〉〕を、占めた、と言う時は、どうなのか。私たちは、音声が響いたままに、思考を、音声の長さ〔mensura〕〔〈持続〉〕に向けてのではないか。おなじようにして、沈黙の〔始まりから終りまでの〕間隔〔intervalla〕〔〈持続〉〕について、あるものを、時間の長さにおいて〔inspatio temporis〕〔〈持続〉の〈長さ〉において〕、示すことができるのではないか〔第三十六節・第二十七章。p. 213, 52—55〕。

さきに、〈静止〉の〈持続〉について語ったように、いままた、アウグスチヌスは、「沈黙」の〈持続〉を「測る」ことに、近づいた。

しかし、〈二つ〉の「沈黙」の〈持続〉の〈長さ〉が、「いかにして」測られ示されるかは、やはり、語られないのである。

くりかえせば、アウグスチヌスは、「過ぎ去ってしまった」「すでに存在しない」音節・音声の・〈持続〉の〈長さ〉を「測る」のは、私が「修練された感覚能力」によってとらえて、「記憶」の中においた・音節・音声の「感じ」〈觀念〉の・〈持続〉を、「思考することによって」である、と言う。

だが、そのアウグスチヌスも、一つ一つの音節・音声の〈持続〉の長短を言うことができるのは、〈時・分〉等

によって、その〈持続〉を、「測る」のでなければ、可能ではないことに、いまだ気づいていない。

このことは、「存在するであろう」「いまだ存在していない」音節・音声の〈持続〉の〈長さ〉を「測る」ことについて、アウグスチヌスが、つぎのように述べているところに、とりわけ、明らかである。

「ある人が、かなり長い長い音声を発しようと思志したとし、その音声は、どれほどの長さになるかを、思考することによって (praemeditando)、決定してしまつたとすれば、その人は、必ず、その・時間〔〈持続〉〕の長さを、沈黙の間に、意図してしまつていた (scitavit) のであつて、そして、その・時間の長さを、記憶にゆだねて、あの音声を発し始めるのであり、その音声は、定められた終点に (ad propositum terminum) 達するまで、響いて行くのである」(第三十六節・第二十七章。p. 213, 59—63)。——発せられようとする音声の〈持続〉の〈長さ〉は、「予考」の中で、「決定」され「意図」されているのであつて、その「予考」「決定」が、その音声の〈持続〉の長さ〈を〉、「測る」ことである——。

こうして、アウグスチヌスは、「過ぎ去つてしまつた」音声については、その〈持続〉の〈長さ〉を、「思考すること」が、また、「存在するであろう」音声については、右を「予考すること」が、音声の〈持続〉を、「測る」ことである、としているのである。

しかしながら、もとより、ある音声を、〈しかじか〉の〈持続〉の長さ・短かさで、発声することを、「予考」し、「決定」し、「意図」することは、可能ではあるとはいへ、その〈しかじか〉の〈持続〉の長短は、発声する〈人〉にとつての〈しかじか〉であるにとどまり、しかし、〈しかじか〉の〈持続〉の長短そのものが、〈どれほど〉(quantum)であるかを、「測る」ことではなく、言いかえれば、その音声の〈持続〉の長短を「測る」ことではない。

重ねていえば、その〈しかじか〉の〈持続〉の、しかし〈どれほど〉を、「測る」には、〈分〉、〈秒〉等々の・「日」

の〈部分〉を、《尺度》とするほかはないのである。

## II — 19

ところで、人が、ある詩句を発音し発声する時、すなわち、その人の・〈発音・発声〉しようとする・〈現在している〉「意図」によって、発音・発声が行なわれて行く時には、すでに発音・発声されてしまった詩句部分がある中に存在した時間、すなわち「過ぎ去ってしまった時間」は、〈増大〉して行くのであり、そして、いまだ発音・発声されない詩句部分がある中に存在することになる時間、すなわち「存在するであろう時間」は、〈減少〉して行くのである。そして、これは、その詩句の発音・発声の「意図」が、「存在するであろう時間」を、「過ぎ去ってしまった時間」へ、〈引き渡す〉ことである、といえる。「……しかるに、現在している意図 (intento) が、存在するであろう時間の減少と、過ぎ去ってしまった時間との増大とによって、存在するであろう時間を、過ぎ去ってしまった時間へ、引き渡して行く間に、残っている音声は、響いて行くであろうし、そして、そのようにして経過して、ついには、存在するであろう時間は尽きて、すべての時間が、過ぎ去ってしまった時間となるに至るのである」(第三十六節・第二十七章。P. 213、64—67)。

「存在するであろう時間」が「減少」し、「過ぎ去ってしまった時間」が「増大」して、ついには、「すべての時間が、過ぎ去ってしまった時間となる」のは、くりかえせば、その詩句を発音・発声しようとしている人の「意図」によるものである。

がしかし、その「意図」は、自らに不可分に、三つのものをもつ。一つは、その詩句を発音・発声することにたいする〈期待〉であり、二つは、発音・発声されるべき詩句部分の「予考」〈注視〉であり、そして三つには、発音・

発声された詩句部分の〈想起〉「記憶」である。「しかしながら、いまだ存在していない・存在するであろう時間が、減少しあるいは尽きること、あるいは、すでに存在していない・過ぎ去ってしまった時間が、増大することは、さきほどのことを意図する魂の中に、三つのものがあるからでなくて、どのようにして、行なわれるであろうか。すなわち、魂は、期待もし (et expectat) / 注視もし (et attendit) / 想起もして (et meminisse) / その結果、魂の期待する事柄が、魂の注視する事柄をへて、魂の想起するであろう事柄へ、去って行くのである」(第三十七節・第二十八章。p. 213、1—5)。

すでに見たように、「存在するであろう時間」は、「いまだ存在していない」にも拘らず、やがて、「存在するであろう事柄についての・現在している期待」として、「存在」を取り戻した。「過ぎ去ってしまった時間」もまた、「すでに存在しない」にも拘らず、しかし、「過ぎ去ってしまった事柄についての・現在している記憶」として、「存在」を取り戻した。そして、〈存在しないことを条件として存在している〉「現在している時間」もまた、にも拘らず、「現在している時間についての・現在している凝思」として、「存在」を取り戻した。

ということとは、また、「存在するであろう」「いまだ存在していない時間」の中にある「存在するであろう事柄」が、「いまだ存在していない事柄」であるにも拘らず、「魂」の中にある「期待」として、「存在」を取り戻したことであり、そして、「すでに存在していない」「過ぎ去ってしまった時間」の中にある「過ぎ去ってしまった事柄」が、「すでに存在していない事柄」であるにも拘らず、「魂」の中にある「記憶」として、「存在」を取り戻したことであり、さらに、「存在しないことへ向かっている」「現在している時間」の中にある「現在している事柄」が、「魂」の中にある「凝思」として、「存在」を取り戻したことである。

詩句の発音・発声をめぐって、「期待」と「注視」と「想起」とを語ったアウグスチヌスは、いま、右のことを、こう述べるのである。——「存在するであろう事柄」が、「いまだ存在しない」ことは、否定できない。「にも拘らず、魂の中には、すでに、存在するであろう事柄の期待が、存在している (est) のである」(第三十七節・第二十八章。p. 213, 5—6)。「存在するであろう事柄」とは、実は、「存在している」この「期待」なのである。おなじように、「過ぎ去ってしまった事柄」が、「すでに存在しない」ことは、否定できない。「にも拘らず、魂の中には、なほ、過ぎ去ってしまった事柄の記憶が、存在しているのである」(第三十七節・第二十八章。p. 213—214, 6—8)。「過ぎ去ってしまった事柄」とは、「存在している」この「記憶」である。さらにまた、「現在している時間」が、長さを欠いていることも、否定できない。「にも拘らず、注視は、持続している (perdurat) のであり……」(第三十七節・第二十八章。p. 214, 9)。たしかに、「存在することになる時間が、この注視をつうじて、絶えず、不在 (absesse) へ、動いて行く」にしても(第三十七節・第二十八章。p. 214, 10)、しかし、「現在している事柄」とは、「存在している」この「注視」である——。

ところで、「存在するであろう事柄」は、「存在するであろう時間」の中に「存在」し、「過ぎ去ってしまった事柄」は、「過ぎ去ってしまった時間」の中に「存在」し、「現在している事柄」は、「現在している時間」の中に「存在」する。

してみれば、「存在するであろう時間」は、かつては、「いまだ存在しない」ゆえに、「長くある」ことはできないとされたが、しかし、いまは、「……長い・存在するであろう時間とは、存在するであろう事柄の・長い期待なのである……」とされなければならない(第三十七節・第二十八章。p. 214, 10—12)。また、「過ぎ去ってしまった時間」は、

「すでに存在しない」ゆえに、「長くある」ことはできないとされた。けれども、いまは、「……長い・過ぎ去ってしまった時間とは、過ぎ去ってしまった事柄の・長い記憶なのである……」と言われなければならない(第三十七節・第二十八章。p・214、12―13)。おなじようにして、「現在している時間」もまた、たしかに、「長さを欠いている」とされたにしても、しかし、いまは、長い・現在している時間とは、現在している事柄についての・長く持続する「注視・凝思である」とされるほかはない。

さて、そこで、たとえば、私は、ある詩を朗誦しようとしている。朗誦を始める前には、「私の期待は、詩すべてに、拡がる」。しかし、朗誦を始めてしまうと、「その期待から、私が、過ぎ去ってしまった時間へ、切り落してしまおうであろう分だけ、私の記憶もまた、拡がる」。こうして、「私の・この〔朗誦する〕行為の生命は、私が朗誦してしまったことによって、記憶の中へ、延長して行き(distenditur)、また、私が朗誦しようとしていることによって、期待の中へ、延長して行く」(第三十八節・第二十八章。p・214、14―18)。

朗誦するという「行為」そのものは、身体器官による発声の事柄にすぎない。しかし、「詩」の朗誦である以上は、朗誦は、朗誦されてしまった・詩の部分の「記憶」と、朗誦されようとする・詩の部分の「期待」とからなるものでなければならず、両者からなるところに、朗誦という「行為の生命」がある。

しかしながら、朗誦という「行為の生命」が、一方で、「期待の中へ、延長し」ながら、同時に、他方で、「記憶の中へ、延長し」て行くのは、朗誦にたいする・私の「注視」が、「現在し」「存在し」「持続している」からにはかならない。

朗誦という「行為の生命」が、「期待」と「記憶」の中へ、同時に、「延長して行く」ことは、私の「注視」が、

「期待」と「記憶」との双方へ、「延長して行く」ことであり、そして、そのことは、また、朗誦されようとする・詩の部分が、「注視」の中で、朗誦されてしまった・詩の部分に、移行していくことである。それゆえ、こう言われる。「しかるに、私の注視は、現在しているのであり、この注視によって、存在するであろうものであった事柄は、引き渡されて、過ぎ去ってしまった事柄となるのである」(第三十八節・第二十八章。P・214、19―20)。

もとより、「このことが進行すればするほど、その分だけ、期待は短縮され、記憶は引き伸ばされるのであって、ついには、あの行為がすべて終りを告げ、記憶に移って行った時に、すべての期待は尽きるに至るのである」(第三十八節・第二十八章。P・214、14―22)。

このところから、アウグスチヌスは、言う。「そして、一つの詩全体(の朗誦)に生ずる・このことは、詩の・個々の小部分に生ずるし、また、詩の・個々の音節に生ずる」(第三十八節・第二十八章。P・214、23―24)。いな、「このことは、あの詩(の朗誦)をおそらく小部分とする・さらに長い行為の中に生ずるし、このことは、人間の・あらゆる行為を部分とする・人間の生涯全体の中に生ずる」(第三十八節・第二十八章。P・214、24―26)。さらには、「このことは、人々の全生涯を部分とする・人の子たち(人類)の時(*secundum*)に生ずるのである」(第三十八節・第二十八章。P・214、26―27)。

個人の一生の「時間」も、人類に与えられた「時」も、実は、「存在するであろう事柄」の「期待」が、「現在している事柄」への「凝思」「注視」によって、「過ぎ去ってしまった事柄」の「記憶」「想起」へ、去って行くことであり、その間に、「期待」は「減少」し、「記憶」は「増大」して、ついに、「期待」が「尽きる」ことである。



以上を神に〈告白〉し終ったアウグスチヌスは、『告白・第十一編』の最後で、再び、『神は、天と地とを造った以前に、なにを造ったか』と問う者になりたいして、「……汝〔神〕は、あらゆる時間に先立って、あらゆる時間の・永遠な創造者であり、……」（第四十節・第三十章。p. 215, 11—12）、とくりかえしたのにつづいて、さらに、こうつけ加える。「かくも偉大な知 (scientia) と予知 (praescientia) とに富む魂〔神〕……にとって、過ぎ去ってしまつた事柄と、存在するであろう事柄とが、ことごとく、知られてしまつてゐる (nota) とすれば、……いうまでもなく、この魂にとっては、経過した時のすべてと、残つてゐる時のすべてとが、かくれもない (non lateat) のであり、……いかなる時が、また、どれほどの時が、始まりから去つたか、そして、いかなる時が、また、どれほどの時が、終りまで残つてゐるかは、かくれもないのである」（第四十一節・第三十一章。p. 215, 3—10）。

あの問いを発する者の論旨の要めは、神が、創造者であれば、創造にあつて、神の「意志」に、新旧の〈変化〉があり、であるからには、神は、〈時間〉の中にあるのであつて、「永遠性」ではない、というところにあつた。

アウグスチヌスは、これにたいして、いま、神の「意志」と「知」「予知」とは、不可分であり、そして、神は、その中にすべての被造物が存在する「時間」のことごとくを「知つて」創造した以上、「時間」を創造した神の中には、なんら「意志」の〈変化〉はないのであり、また、「時間」の中にある・他の・あらゆる被造物を「知つて」創造した神の中には、なんら「意志」の〈変化〉はない、したがつて、「神」は、「時間」の中にはない、と答えるのである。

こうして、神は、「凝然として不動の永遠性」である、と言われたように、いままた、「不易にして永遠なるもの」

と言われる(第四十一節・第三十一章。p・216、17)。

その上、神の「知」と「意志」とに、なんらの〈変化〉もないことは、その「知」「意志」に発する・神の・創造の「行為」もまた、「凝然として不動」な「時間」としての「現在」において行なわれ、それゆえ、神の・創造の「行為」は、なにも、〈持続〉を、「延長」を、もたないことにほかならない。

それゆえ、こう述べられるのである。「ゆえに、汝〔神〕は、初めにあって、汝の知の変化を伴わずに (*sine uariatione notitiae tuae*)、天と地とを、知ってしまったている (*nostru*) ように、汝は、初めにあって、汝の行為の延長を伴わずに (*sine distinctione actionis tuae*)、汝の行為の差別を伴わずに (*sine distinctione*)、天と地とを、造ってしまったている (*fecisti*) のである」(第四十一節・第三十一章。p・216、17—19)。

「われわれ」の「知」は、必ず、「変化」の中にあり、それゆえ、「時間」の中にある。「われわれ」の「行為」は、必ず、「延長」(〈持続〉)の中にあり、それゆえ、「存在するであろう時間」から、「現在している時間」をへて、「過ぎ去ってしまった時間」へ、移行行くものである。

しかしながら、「神」の「知」と「意志」と「行為」とは、「凝然として不動な」「現在」の中にありつづけるものである。